長崎県文化財調査報告書　第198集

稗田原遺跡Ⅶ

一般県道野田島原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

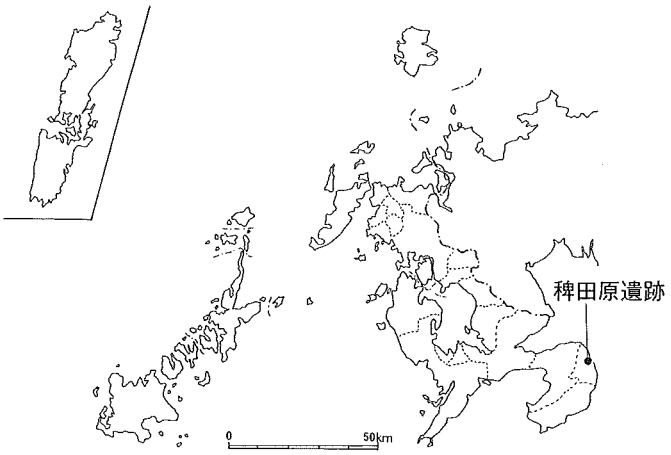
2008

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書　第198集

稗田原遺跡Ⅶ

一般県道野田島原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2008

長崎県教育委員会

稗田原遺跡近景

稗田原遺跡河川跡検出状況

発刊にあたって

本書は、一般県道野田島原線道路改良工事に伴い長崎県教育委員会が実施した稗田原遺跡の発掘調査報告書です。

稗田原遺跡は、平成７年以来、県道改良工事に伴い９度にわたり長崎県教育委員会が発掘調査を実施しています。過去の調査では、縄文時代の土器・石器をはじめ、古墳時代の竪穴住居跡と土器、鎌倉時代から室町時代ごろにかけての河川の跡など、長い期間にわたりこの地域に住む人々の生活の痕跡を確認することができました。

今回の調査では、小規模の調査面積にもかかわらず鎌倉時代の河川跡と多くの出土遺物を発見することができました。特に中国製の貿易陶磁器や、近隣の遺跡ではあまり見ることのない国産の陶磁器など出土しており、稗田原遺跡があるこの地域が交易の拠点的な場所であったことがうかがえます。

この調査成果が、これからの調査研究の学術的資料として広く活用され、文化財の保存活用に役立つことができるよう念願いたします。

最後に、発掘調査の実施にあたり、御理解と御協力をいただいた地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成20年３月31日

長崎県教育委員会教育長

横田　修一郎

例　　言

1．本書は、一般県道野田島原線道路改良工事に伴い実施した稗田原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は長崎県教育委員会が主体となり、平成19年10月22日から11月２日にかけて実施した。

3．調査関係者は次のとおりである。

長崎県教育庁学芸文化課　文化財班　課　長　補　佐　　古門　雅高
主任文化財保護主事　　福田　一志
文化財保護主事　　寺田　正剛（調査担当）
文化財保護主事　　古澤　義久（調査担当）

4．本書で使用した遺構実測、現場での写真撮影は寺田と古澤が行った。
　また、遺物の実測については、浜崎美加・中村千春・野島愛子・頭島直美・山村きよみ・津田由紀・山本幸子・氏田香織・松尾咲江・藤田良子・前田文江・中里明美・寺田が、トレースは横田愛子・寺田が、遺物写真撮影は寺田が行った。

5．本書に収録した遺物、写真、図面は長崎県教育庁学芸文化課資料整理室で保管している。

6．発掘調査を実施するにあたり、土橋啓介（島原市教育委員会社会教育課主査）にご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

7．本書の執筆・編集は、寺田が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の立地と環境 …… 1

Ⅱ　調査に至る経緯 …… 3

Ⅲ　調　　査

1　調 査 概 要 …… 5

2　遺　　構 …… 5

(1)　河川跡

(2)　石列遺構

(3)　柱穴

(4)　土壙

3　遺　　物 …… 9

(1)　貿易陶磁器

(2)　土師器・土製品

(3)　須恵器

(4)　瓦質土器

(5)　縄文土器・弥生土器

(6)　石器

(7)　滑石製品

(8)　鞴の羽口

(9)　鉄製品

Ⅳ　ま　と　め …… 20

挿　図　目　次

第１図　稗田原遺跡位置図（１/20,000）……1
第２図　島原半島北部主要中世遺物出土遺跡分布図（１/30,000）……2
第３図　稗田原遺跡調査区位置図（１/5,000）……3
第４図　調査区西側土層図（１/80）……6
第５図　遺構配置図（１/80）……6
第６図　調査区中央サブトレンチ南側土層図（１/80）……7
第７図　畦状遺構断面図（１/40）……7
第８図　２号土壙・平面図および土層図（１/20）……8
第９図　出土陶磁器［青磁・白磁］（１/３）……9
第10図　出土土器①［土師器など］（１/３）……11
第11図　出土土器②［須恵器］（１/３）……12
第12図　出土土器③［瓦質土器など］（１/３）……13
第13図　出土土器④［縄文土器・弥生土器］（１/３）……14
第14図　出土石器（１/３）……15
第15図　滑石製品（１/３）……17
第16図　鞴の羽口（１/３）……17
第17図　鉄製品（１/３）……18

表　目　次

表　出土遺物観察表……18～19

図　版　目　次

図版１　稗田原遺跡近景／河川跡検出状況①／河川跡検出状況②
図版２　土層堆積状況／河川内礫集中状況／河川内石列検出状況
図版３　青磁出土状況／石斧出土状況／調査風景
図版４　出土遺物①
図版５　出土遺物②
図版６　出土遺物③

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1．地理的環境（第１図）

稗田原遺跡は島原市の北東部に位置し、標高約23～43mの丘陵上に立地する遺跡である。遺跡の範囲は東西約700m、南北約450mで、総面積は約315,000m²と広範囲に及ぶ。

稗田原遺跡が所在する島原半島は、雲仙岳を中心として放射状丘陵がのびており、その丘陵上の先端部周辺に遺跡が立地することが多い。古くから火山活動が盛んな地域であることから地層には火山灰や土石流・火砕流の堆積層が観察され、その層中に古くは30,000年前の旧石器時代から現代までの生活の痕跡を見ることができる。1991年から1995年に噴火した普賢岳の活動では島原市街地を中心として火山灰が堆積し、島原市と南島原市深江町との市境を流れる水無川や島原市北部の中尾川では大規模な土石流がおこり、河川が埋没するほどであった。かつて島原半島が形成された過程を実見することができたできごとといえよう。

島原半島への経路は大村・諫早からつながる陸路か、福岡県南部から熊本県北部一帯とを結ぶ航路がある。現在でも島原半島から熊本県、長洲港、天草諸島へのフェリーが航行しており、穏やかな有明海を介した交通網の発達を見ることができる。島原半島の文化の流通はこうした交通網の影響を如実に反映しており、北部九州地域より中九州地域との密接なつながりを感じる出土遺物が多い。

第１図　稗田原遺跡位置図（１/20,000）

2．歴史的環境　～島原半島北部の中世遺物出土遺跡から～（第２図）

古代においては『延喜式』の中に肥前国の駅路として次のように想定されている。

太宰府から肥前国府（佐賀大和）へつながる官道は、彼杵の荘（大村市福重町）を通り高来郡の船越駅（諫早市）に至る。その後、島原半島に入り山田駅（雲仙市吾妻町）から野島駅（島原市）を通り肥後国（熊本県宇土市）へ渡る。

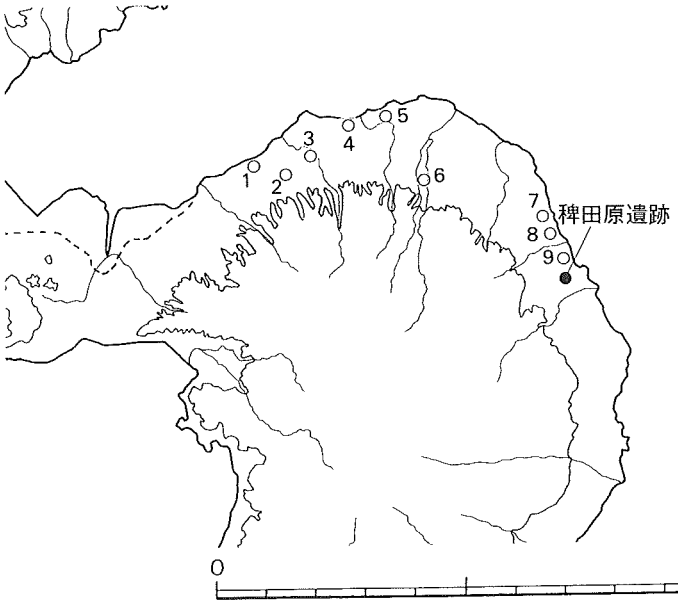
この古代の官道がいつまで利用されたかはわからない。ただ、島原から熊本に渡る道があったことは間違いなく、熊本地方との直接的な交易があったことが推測される。

第２図は、このルート沿いにある島原半島北部の中世前期の出土遺物がある遺跡をまとめたものである。中世前期における島原半島北部の具体的な交通路は今までのところ不明である。古代では以前から雲仙普賢岳からのびる丘陵の中位部分に古墳が点在することからこれらを結ぶルートが有力視されていた。ただ、近年雲仙市瑞穂町や国見町で圃場整備に関連する広範囲な発掘調査が実施され、古代から中世の主要な遺跡が低地部（標高100m以下）に集中することが確認されており、これらの遺跡をむすぶ海岸沿いの交通路が見え始めている。

これらの遺跡に共通することとして２つの点が上げられる。

１つは出土遺物の共伴関係である。ほとんどの遺跡が龍泉窯系青磁もしくは同安窯系青磁と白磁の貿易陶磁器、土師器皿・須恵器甕・擂鉢の国内産土器等、滑石製石鍋を共伴している。時期としては13世紀後半から14世紀にかけてと推測されるが、この時期の遺跡の共伴関係はいずれも同様なセット関係である。特に龍泉窯系青磁においては中国産貿易陶磁ではあるもののかなり広範囲に分布域をもっており、出土した地域が交易拠点であるというよりも、青磁がかなり日常容器化し各地域に間接的に搬入されたと考えたほうが自然である。

２つ目は製鉄関係の出土遺物である。鞴の羽口を出土する遺跡が10遺跡のうち５遺跡（稗田原遺跡を含む）で、鉄滓もかなりの量出土している。ただし、製鉄遺構が確認された遺跡はあまりなく、製品を伴うことは非常に少ない。雲仙市国見町土黒川流域では素材となる砂鉄が多く採れていたという話もあることから島原半島の随所で製鉄が行われており、主要な遺跡を中心とする「町」の産業の一つであったと推測される。



島原半島北部の主要中世遺物出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	主な中世出土遺物
1	陣ノ内遺跡	雲仙市瑞穂町	白磁・龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・土師器皿・瓦器・羽口・砥石・滑石製品ほか
2	京ノ坪遺跡	雲仙市瑞穂町	龍泉窯系青磁・擂鉢・土師器皿・石鍋・片口鉢・羽口・鉄滓・鉄製品
3	杉峰城跡	雲仙市瑞穂町	龍泉窯系青磁・土師器（皿・坏）・擂鉢・土釜・火鉢・瓦質土器・羽口
4	尻無城跡	雲仙市瑞穂町	須恵器甕・土師器皿・瓦質土器・石鍋
5	筏遺跡	雲仙市国見町	龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・土師器（皿・坏）・擂鉢
6	石原遺跡	雲仙市国見町	龍泉窯系青磁・土師器（皿・坏）・須恵器擂鉢・石鍋・羽口
7	一野遺跡	島原市有明町	擂鉢
8	松尾遺跡	島原市有明町	白磁・同安窯系青磁・石鍋
9	畑中遺跡	島原市中原町ほか	白磁・龍泉窯系青磁

第２図　島原半島北部主要中世遺物出土遺跡分布図（１/30,000）

Ⅱ　調査に至る経緯

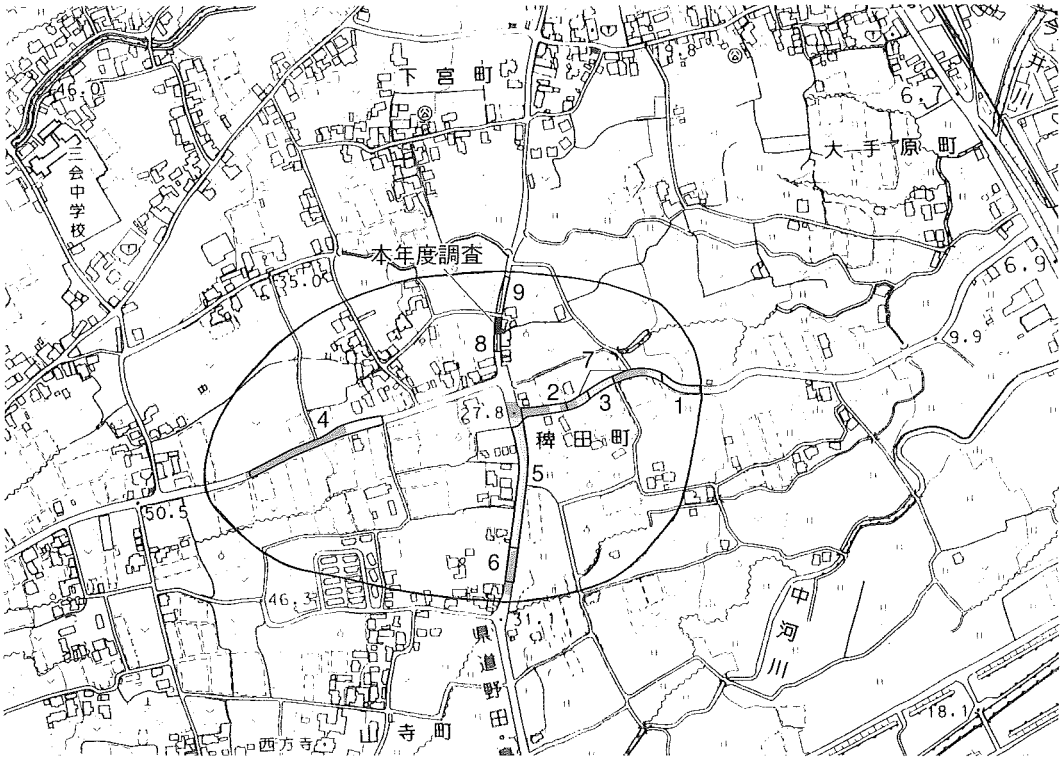
稗田原遺跡は、昭和56年の分布調査で縄文時代晩期土器、白磁片等が採集されたことにより周知化された遺物包含地である。

平成３年の雲仙普賢岳噴火に伴う災害復旧道路として当該地区の県道拡幅工事が計画されて以来、15年にわたり９回の発掘調査が実施されている（第３図）。遺跡のほぼ中央を十字に県道が通っており、東西方向を礫石原松尾停車場線、南北方向を野田島原線と呼んでいる。

平成４年から７年度までは遺跡東側の調査を実施した。この調査区では縄文時代早期の押型文土器・円筒形土器、晩期の条痕文土器・磨研土器・組織痕土器・打製石斧などが出土し、古墳時代前期の竪穴式住居跡が検出されており住居跡内から土師器が出土している。住居跡内から出土した古墳時代前期の一括遺物としては貴重な資料といえる。

平成８年度は遺跡西側の最高部に位置する調査区であり、縄文時代晩期の溝・柱穴・集石遺構の遺構が確認され、条痕文土器・磨研土器・組織痕土器・打製石斧・スクレイパー・磨石などの遺物が出土している。特に組織痕土器の組織文の多様さと成形や使用方法について考察できる資料としては特徴的である。また、この地区は過去の調査の中で縄文時代晩期の遺物の数量が最も多くかつ多様であり、遺跡内での縄文時代晩期の中心的な地域といえよう。

平成９年度から10年度にかけては遺跡南側で調査を実施している。この調査区では古代から中世の遺構が中心であり、河川跡や径20～40㎝程の柱穴跡などが検出されている。また、古代の遺物として越州窯青磁・須恵器・土師器・黒色土器、中世の遺物としては龍泉窯系青磁・白磁・青花・李朝青磁・東播系捏鉢・備前系擂鉢・須恵器甕・土師器皿・滑石製品などが出土している。平成５年の２次



第３図　稗田原遺跡調査区位置図（１/5,000）

調査での分岐点の調査地点では南北に並ぶ柱穴列が確認されており、古代から中世にかけての集落が存在したことが推測される。

平成17年度から18年度にかけては遺跡北側の調査区であり、東西に延びる丘陵の北側傾斜部に位置する。この調査区では南北に流れる河川跡が確認されており、埋土中には古代から中世にかけての遺物を包含している。特に龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・白磁・東播系捏鉢など中世前半の遺物が集中して出土した。また、滑石製品が目立ち、鞴の羽口や鉄滓などの製鉄の形跡をうかがうことができる資料が特徴的である。

今年度の工事区域は平成17年と平成18年に実施した県道野田島原線拡幅工事区間中にあたり、用地買収の結果の工事が実施される区域である。稗田原遺跡北側に近年開通した島原がまだすロードと連結する道路で、朝夕は通勤路として利用者が多い路線であり、事業の実施が急がれた工事区間でもある。

今回の調査区は、前回の調査の成果から河川跡が検出し、中世前期の遺物や製鉄関係の遺構・遺物が出土することが予想された地区である。調査面積は約105㎡で、平成19年10月22日から11月２日にかけて調査を実施した。

【参考文献】

「稗田原遺跡Ⅰ」長崎県文化財調査報告書第136集　長崎県教育委員会　1997
「稗田原遺跡Ⅱ」長崎県文化財調査報告書第145集　長崎県教育委員会　1998
「稗田原遺跡Ⅲ」長崎県文化財調査報告書第152集　長崎県教育委員会　1999
「稗田原遺跡Ⅳ」長崎県文化財調査報告書第157集　長崎県教育委員会　2000
「稗田原遺跡Ⅴ」長崎県文化財調査報告書第161集　長崎県教育委員会　2001
「稗田原遺跡Ⅵ・下宮遺跡」長崎県文化財調査報告書第194集　長崎県教育委員会　2007

Ⅲ 調　　査

1. 調査概要

調査区は長さ約21m、幅約５mの南北に細長い形状であり、105㎡の面積を測る。ほぼ中央部を境に南北２区に区切り、南側を１区、北側を２区として遺物の取り上げや記録保存を行った。また、調査区や遺構の位置については世界測地系の基準から測定し明示した。

調査は、調査区を区切る境界のベルトを残しながら表土および旧耕作土を重機で掘削し、以下を人力で掘り下げた。遺物の取り上げは包含層中の遺物については各調査区の層位ごとに一括し、明らかに遺構内から出土したものに関しては遺構ごとに一括した。

調査の結果、当初から予定された南北方向へ流れる河川跡が検出され、河川内には石列や集石など人為的な痕跡をのこす遺構が確認された。河川内の層位を観察すると、下層に砂質が混在するラミナ層が観察されることから自然流路であったことが明確である。ただしこれらの河川内の遺構がどのような性格を有したかは疑問が残る。また河川跡内外から８ヶ所の柱穴が確認されており、河川成立以前から建物跡等が存在したことが予想される。さらに黄褐色粘質土の埋土を有する楕円形の土壙が６基検出されているが、遺物を全く含んでいないことから性格や時期は不明である。

主な遺物としては、中世前半の貿易陶磁器、国産土器（土師器・須恵器・瓦質土器等）、滑石製品、鞴の羽口、鉄滓などがあり、調査面積の割に多くの遺物を出土している。

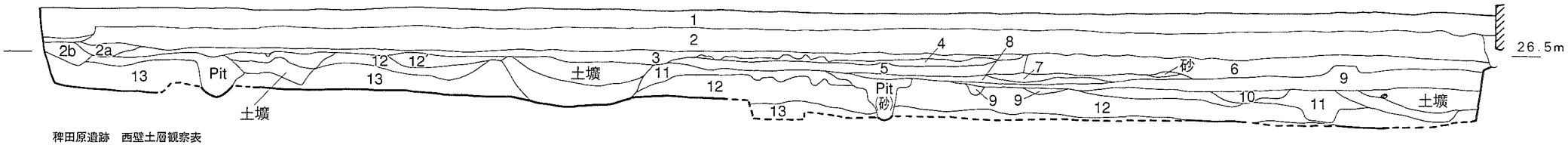
基本層序（第４図）は、Ⅰ層は暗灰色の現耕作土層、Ⅱ層は暗褐色の旧耕作土層、Ⅲ層は黄褐色と黒色の撹乱層（造成土か）、Ⅳ層は黒褐色砂質混在土層、Ⅴ層は黒灰色砂礫混在土層、Ⅵ層は黄褐色粘質土層、Ⅶ層は暗赤灰色礫混在硬質土（カシノミ層）、Ⅷ層は黄灰色砂層である。Ⅱ層では鉄分が沈着した層位が幾層にも見られることから、この地が水田として幾度となく利用されたと推測される。Ⅳ・Ⅴ層が中世の遺物包含層であり、Ⅴ層が河川跡の埋土にあたる。前述した土壙の埋土はⅥ層からの落ち込みと考えられるが、Ⅵ層の下に黒色土が入るなど転地返しが観察されており倒木痕の可能性が強い。Ⅶ層は雲仙市国見町百花台遺跡の基本層序Ⅳ層と同質層であり、旧石器時代の基盤層と考えられたが、下層から砂層が確認されたためブロック状の堆積層であると判断される。

2. 遺　　構

(1) 河　川　跡（第５図）

河川跡は１区の東側部分から２区にかけて検出された。調査区の南東から真北への流れが推測されている。河幅については西岸は明瞭であるが、東岸が確認されておらず不明である。２区では当初東側に立ち上がりが確認されたが、その後の調査で河川の支流の立ち上がりであることが判明したため本流の中心はさらに東側であることが確認されている。

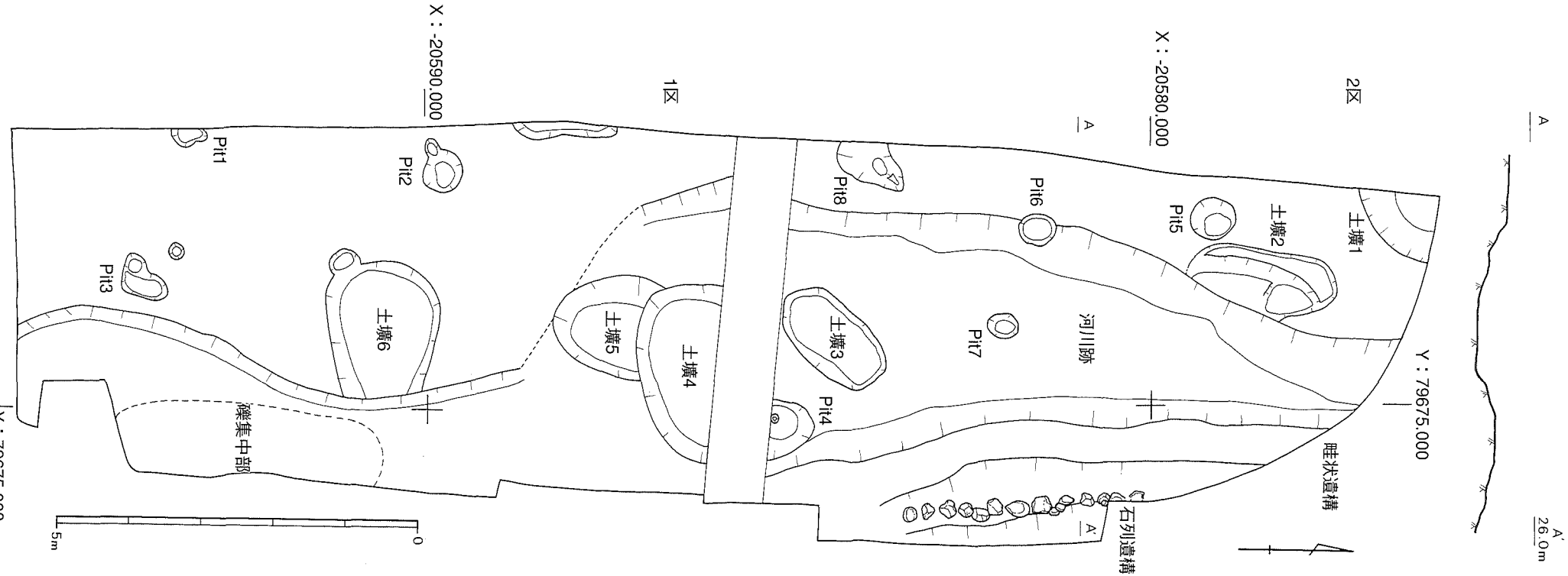
１区では西側のプランのみ確認されているが、基盤層が砂層であるために立ち上がりは不明瞭である。調査区南東隅には礫が河川跡内に集中して確認された。礫はほとんどが拳大ほどの円礫であり、その中には擂鉢などの瓦質土器や滑石製品が混在している。また中には多量に砂礫が付着する鉄滓や熱の影響を受けた砥石なども見られ、隣接したところに製鉄施設が存在することが推測される。今回の調査区の中においては礫が集中する部分はこの一帯でしか観察されないため、意識的に投棄された



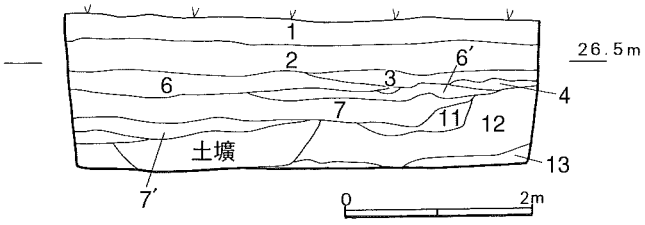
稗田原遺跡　西壁土層観察表

1　灰色耕作土〔黄灰色（2.5Y6/1）〕【基本層序Ⅰ層】
2　褐灰色白色土粒混在旧耕作土、下層に鉄分沈着〔にぶい黄褐色（10YR5/4）〕【基本層序Ⅱ層】
3　暗灰色土、白色土粒をまばらに含む〔黄灰（2.5Y5/1）〕
4　黄色土混在、造成土か〔浅黄（2.5Y7/4）〕
5　黒褐色混在土（黄褐色土混在）、4と同時期に堆積か〔黒（2.5Y2/1）〕【基本層序Ⅲ層】
6　暗灰色白色土粒混在土〔褐灰（10YR4/1）〕【基本層序Ⅳ層】
7　黒色土〔黒（2.5Y2/1）〕
8　黒褐色・黄褐色混在土
9　黒色砂質混在土〔黒（10YR2/1）〕、白色土粒・黄褐色土粒混在土【基本層序Ⅴ層】
10　黒褐色土〔黒（10YR2/1）〕、白色・橙色土粒をまばらに含むしまりのない層
11　暗黄褐色土〔灰黄褐（10YR4/2）〕、白色・橙色土粒をまばらに含むしまりのない層【基本層序Ⅵ層】
12　灰褐色パミス混在硬質土（カシノミ層）〔褐灰（10YR5/1）〕【基本層序Ⅶ層】
13　明黄色砂層、下層に円礫混在〔にぶい黄（2.5Y6/4）〕【基本層序Ⅷ層】

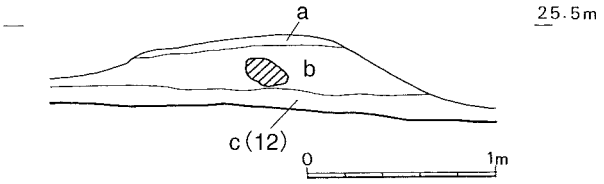
第4図　調査区西側土層図（1/80）



第5図　遺構配置図（1/80）



第６図　調査区中央サブトレンチ南側土層図（１/80）



第７図　畦状遺構断面図（１/40）

ことが強いと考える。また河川跡内埋土の上層からは磨製石斧など縄文時代晩期の遺物が混在しており、周辺地域からの流れ込みと考えられる。

２区では調査区の西側付近にⅦ層からの落ち込みとして確認されており、深さは約40cmを測る。上層はⅣ層黒褐色土、下層はⅤ層黒灰色土であり最下層には青灰色砂質土の堆積が確認された。河川跡の床面は硬くしまっており、砂質の沈着が見られる。この河川内の掘り下げを行っていたところ調査区東側に立ち上がりが確認されたことから当初はここが河川の対岸と考えていた。その幅は２区の北側で約1.9m、南側で約3.5mと南側にいくにつれて幅広となっている。この部分は河川の支流と考えられ、多くの遺物が出土している。また、遺物もあまり摩滅していないことから、ほぼ現位置をとどめており、水はあったとしてもそれほど流れがない状態であったといえる。これらのことから判断して、この遺構は人為的に形成された河川の取水場の可能性が強い。

一方、東側の立ち上がり部分は約0.5mの幅で畦状の高まりを持ち河川と同じ方向を向く。畦状遺構の上面（第７図ａ層）はねじり鎌の刃が立たないくらい非常に硬くしまっており、その下の層位はⅦ層と同質の礫混在層（第７図ｂ層）、最下層に青灰色砂層（第７図ｃ層）が観察される。ａ層の中には時期は明確ではないが白磁片が出土しており、上層の硬質度や幅の均一性などを考慮すると、人工的に形成された畦状の通路と考えられる。また、この遺構に平行して検出された石列がその裏づけとも言える。

河川跡の時期は少なくともⅤ層が堆積した時期と同時期かそれよりも若干古いことが予想されることから13世紀前半から14世紀ごろと考えられる。

(2) 石列遺構（第５図　２区東側）

前述したが２区調査区東側の河川跡内に１条の石列遺構が検出された。石列の長さは現存長約3.4mで直線的に配されており、さらに南東側へ延びることが予想される。石列の石材は径30cm程の円礫の火成岩（安山岩系）で、高さはほとんど均一であり河川西側の河岸部の標高とほぼ同じである。河川跡の層位はこの石列を境に変化しており、石列の西側は単純な堆積層であるが、東側は薄い砂を含むラミナ層が観察される。このことが河川の本流が東側に予想される根拠となっている。またこの遺構の性格は、上述した畦状遺構同様、河川の本流と支流を区別する区画と考えることが自然であり、本来の旧河川西側護岸の可能性もある。石列の時期は二次的な遺構と考えることから河川跡よりもやや新しい時期につくられたものと考えられる。

(3) 柱　　穴（第５図）

柱穴は１区で３ヶ所、２区で５ヶ所検出されており、調査区が狭いため並びは確認できなかった。柱穴の径は50～80㎝程で、明確な立ち上がりをしている。

１区ではⅦ層が薄いことからⅧ層黄灰色砂層に掘り込む状態で検出されている。埋土は黒色で、河川跡と同時期の埋没時期と思われる。柱穴内からの遺物の出土は無い。

２区ではPit５～７が１区と同様埋土が黒色の柱穴である。Pit７は河川跡の河床面に確認された柱穴であるが、埋土が黒色であることから河川と同時期に埋没したと考えられ、前述した取水関連施設の一部である可能性が高い。Pit８は深さが約60㎝と深く、青灰色砂層を埋土とする柱穴である。青灰色砂層は河川跡最下層の層位と同質であり、河川が流れていた時期に埋没した柱穴といえる。

(4) 土　　壙（第５図・第８図）

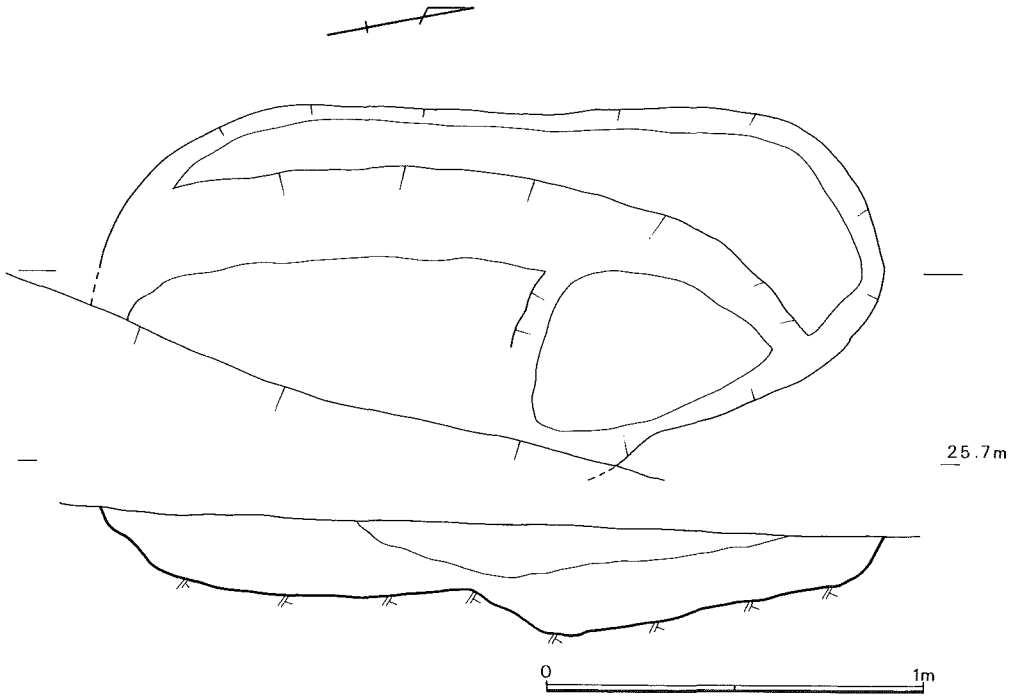
土壙は１区で３基、２区で３基確認されている（第５図）。いずれも平面形は楕円を呈しており、規模は均一ではない。長軸の方位もまちまちであり、意識的に形成された土壙群とは考えられない。

１号土壙は２区の北西隅に確認されている。調査区西壁で土層が確認されるが、Ⅵ層黄褐色土の下に黒褐色土が見られ、層位の序列が反転している。

２号土壙（第８図）は南東を河川跡と切り合った状態で検出された。長さ約2.1m、幅約1.0m、深さ約0.3mを測る。土壙内の床面は数段のテラスが見られ、土層は１号土壙同様、転地返しの痕跡を残す。

３号～５号土壙はいずれも河川跡の下から確認された。黄褐色の埋土である。６号土壙も２号土壙同様河川跡との切りあいをもつ。

これら土壙は河川跡が形成する前から存在した遺構であり、断面を確認した土壙から判断すると上位の層が下層へ入り込む現象が観察されるため、倒木痕の可能性が高い。遺物は全く見られず時期は不明である。



第８図　２号土壙・平面図および土層図（１/20）

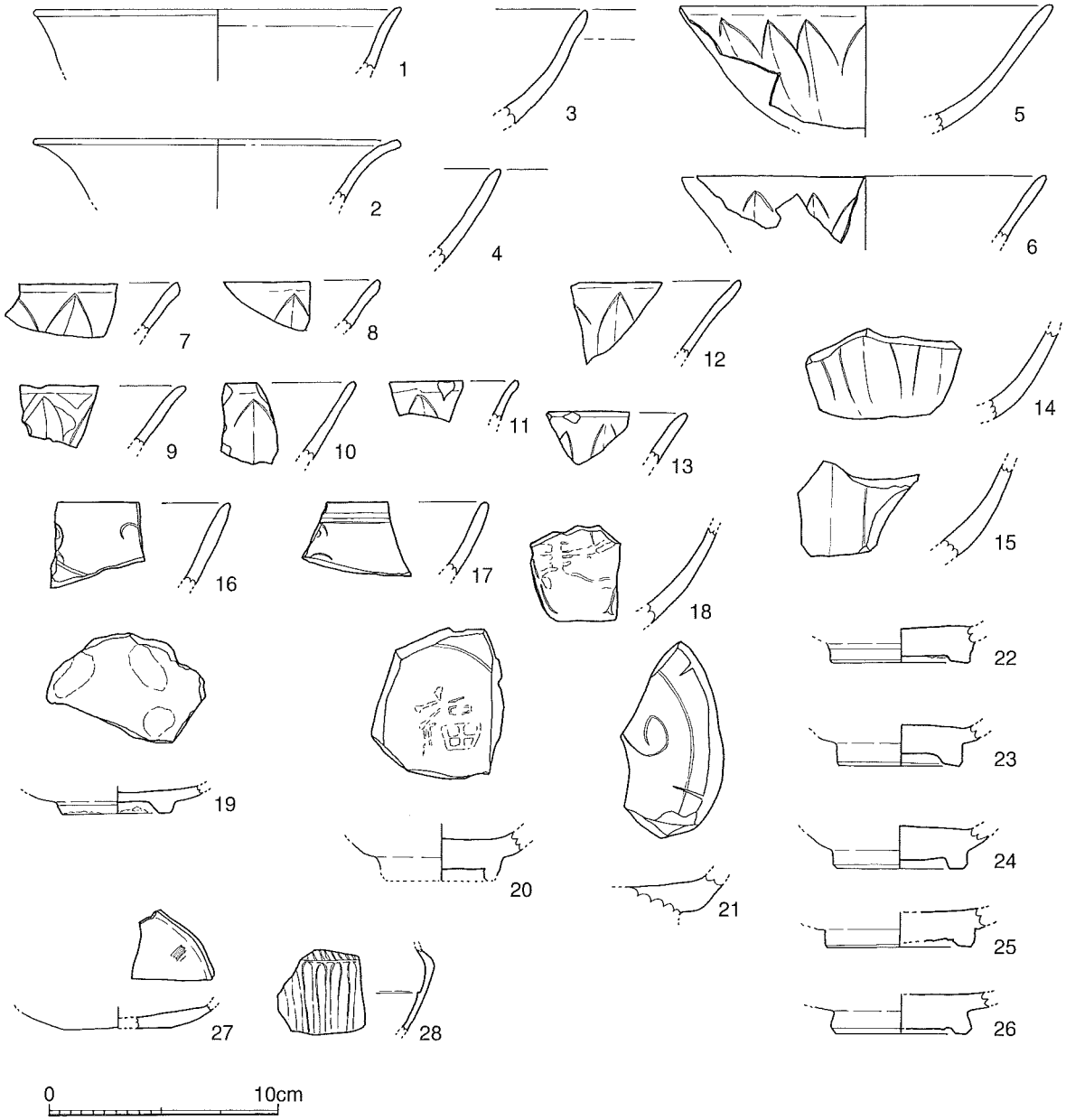
3．遺　　物

(1) 貿易陶磁器（第９図）

貿易陶磁器としては白磁・青磁が出土している。白磁は形状・部位が判断される遺物はなかったためほとんど図化していない。鎬連弁を有する龍泉窯系青磁の割合が非常に高く、同安窯系と判別されるのは１点のみである。器形や部位、文様が判るものについて図化した（註１）。

１～３は口縁端部が外反する無文の口縁部である。２は白磁の口禿で外側への反りが大きい。４は素口縁の無文の椀で、口唇が鋭角を呈す形態。越州窯か。５～13は若干端反りがある鎬連弁の龍泉窯系青磁口縁部である。山本分類椀Ｉ５ｂ類。14・15は鎬連弁椀胴部。16・17は内面に劃花文の口縁部、18は椀の胴下半部で、施文は不明確だがうろこ状のカキ目痕が見られる。

19は胎土目痕を残す青磁碗。器壁が薄く越州窯か。20は内側見込みに「福」の字の刻印を施す。21



第９図　出土陶磁器［青磁・白磁］（１/３）

は内面見込みに片刃彫りの施文のある皿の底部か。22～26は龍泉窯系青磁碗の底部である。いずれも高台の削りだしが浅く畳付が短い形態である。27は同安窯系皿底部である。内面の見込みに劃花が一部見られる。山本分類皿Ｉ１ｂ類。28は小壺胴部、香炉か。器壁か非常に薄く、外面に幅広の鎬文が見られる。胴部は丸く張り出し、くの字の屈折部をもち口縁部にかけては内弯する。釉薬が薄く凸部はほぼ白色であることから青白磁とも呼べる。

青磁からみる年代は、５の龍泉窯系鎬連弁碗および27の同安窯系皿などから12世紀後半から13世紀前半に比定することができよう。

(2) 土師器・土製品（第10図）

29～37は土師器皿である。29～32はヘラ切り、33～36は糸切りの底部である。29は立ち上がりが非常に短く外側に直行する形態。口径8.8cm、高さ1.3cm。30は器壁が厚くやや丸みを持つ形態。口径8.8cm、高さ1.5cm。31は胴部が丸く高さが短い形態。口径7.2cm、高さ1.2cm。32は器壁が非常に厚く丸く張り出す形態。口径7.2cm、高さ1.4cm。33は直線的に立ち上がり口唇が鋭角な形態。口径7.6cm、高さ1.3cm。34は胴部が丸く張り出し口唇が鋭角な形態。口径は8.0cm、高さ1.0cm。35は直線的に開口する形態。口径7.8cm、高さ1.4cm。36は胴部から口唇にかけて直線的で端部は丸くおさめられる形態。口径7.8cm、高さ1.4cm。37は胴部から口縁にかけて屈折部を有する形態。口唇は丸く、口径11.4cm。

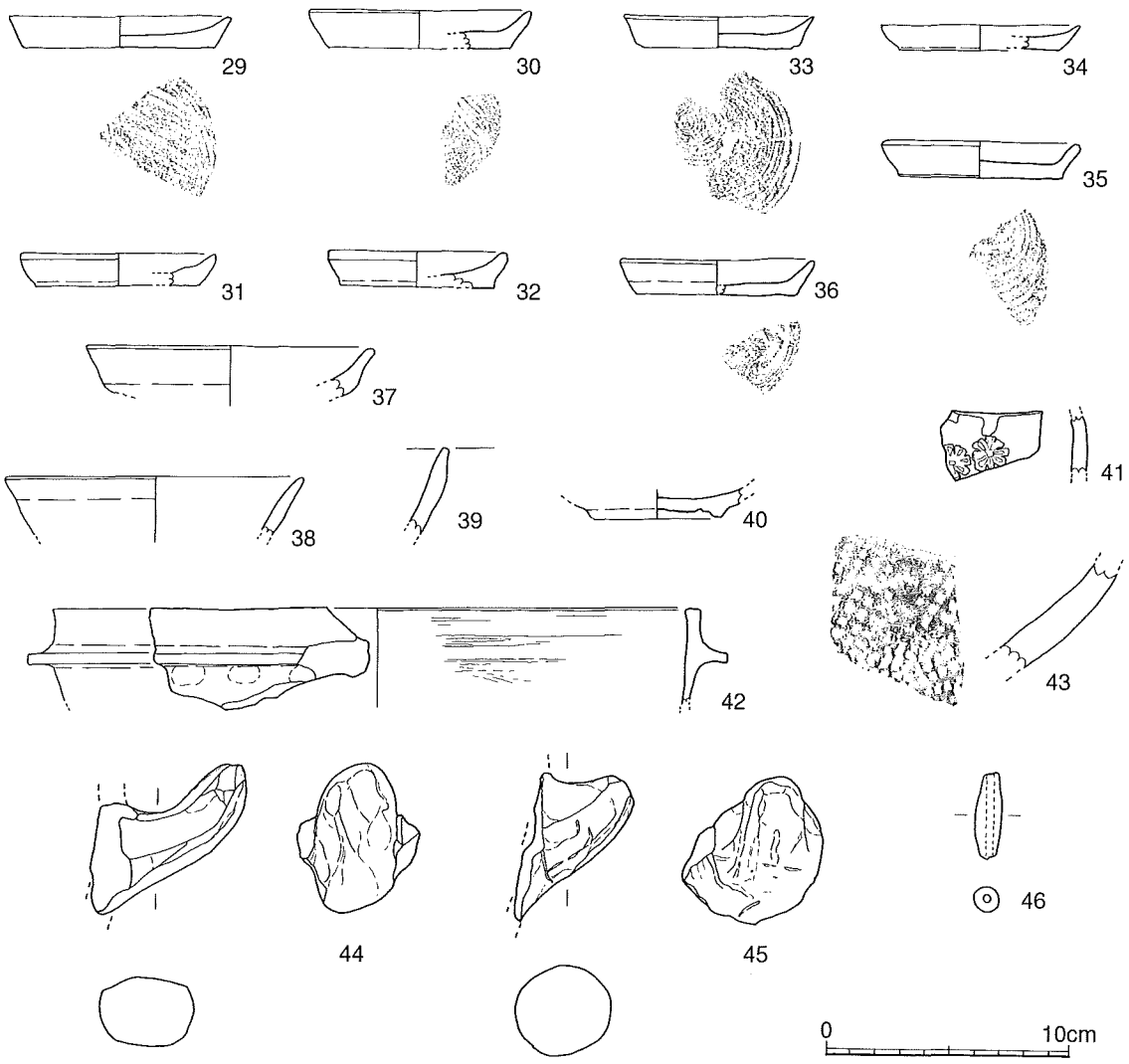
38は直行し開口する坏口縁部。口径は11.8cm。39は若干内向する口縁部、外面に回転ヨコナデの痕跡を残す。40は内外面にヘラミガキを残す黒色土器椀底部、Ｂ類に属する。高台が非常に低い形態である。41は奈良火鉢口縁部、外面に花文のスタンプを押捺する。浅鉢Ｉ類に属する。42は土釜の口縁部、コ字形の長い鍔を口縁下位に有するもので、口径は約26.0cmを測る。畿内系（註2）か。石鍋が一般的である長崎県の地域において土釜の出土は非常に珍しく、流通経路や使用方法について検討の余地がある。43は外面に格子の叩き痕を施す胴下半部で土師質土器としては珍しい。土釜の可能性が強い。44・45は把手、甑か甕か。46は土錘、現在も民俗資料として利用例あり。

土師器皿の特徴としては、口径にくらべ器高が大きい形態であり、13世紀前半から後半にかけての特徴を持つ。40の黒色土器は11世紀前半ごろか。41の火鉢は14世紀前半、42の土釜が14世紀中ごろと推測される。

(3) 須　恵　器（第11図）

47～58は甕の口縁部および胴部である。47は大甕の口縁部である。大きく外側に反転する形態で、外面に連続した叩きにより粘土の襞が形成されている。口縁にはヨコナデ、頸部の内面には斜めの粗いハケ調整の痕跡を残す。口径は約39.6cmを測る。48～54は甕胴部で、外面に格子の叩き目が残り、内面は粗いハケ状工具による多方向からの調整痕を残すものである。55・56は外面に格子叩き目、内面には平行条線の当て具痕を残す。57は外面に格子叩き目とヨコ方向のカキ目、内面には連続した同心円状の叩き痕「青海波文」が観察できる。58は外面に格子叩き目と内面には車輪状当て具痕を残す。

59は東播系鉢の口縁部で、ほぼ同じ厚さで直線的に開口する形態である。外面は指圧痕を残すナデ仕上げ、内面は斜め方向の粗いハケ目が見られる。60も59同様直線的に開口する口縁部で内面に擂目が見られる。61はやや胴部に膨らみをもつ立ち上がりで口唇三角を呈する形態。片口で内面には１束



第10図　出土土器①［土師器など］（1/3）

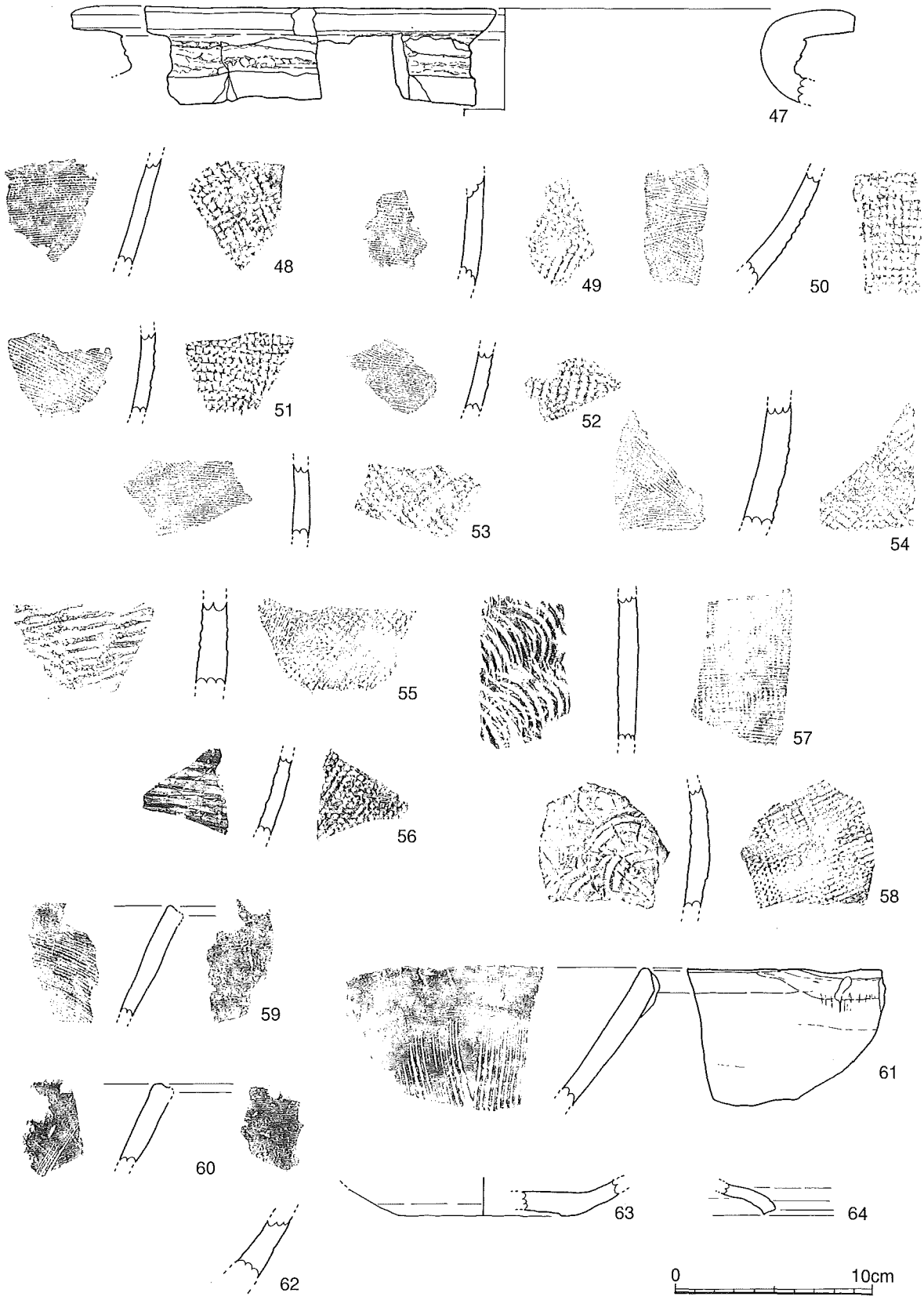
12本以上の擂目を持つ。62は底部付近、内外面ナデ仕上げ。63は鉢の底部、ヘラによる切り離し痕が観察される。底径約8.4cm。64は坏蓋の縁部である。

須恵器の産地についてはさまざまな系統があり、当遺跡から出土した須恵器の系譜については判断が難しいところがある。甕については内外の叩きの文様から判断して熊本県荒尾市樺番城窯の可能性は否定できない。ただ、鉢については捏鉢から擂鉢への移行も加味すれば、東播系もしくは備前系と考えられる。一つ一つの土器の産地はまちまちであるが、共伴する遺物との組み合わせが重要と考えられ、総合的に判断することが賢明であろう。

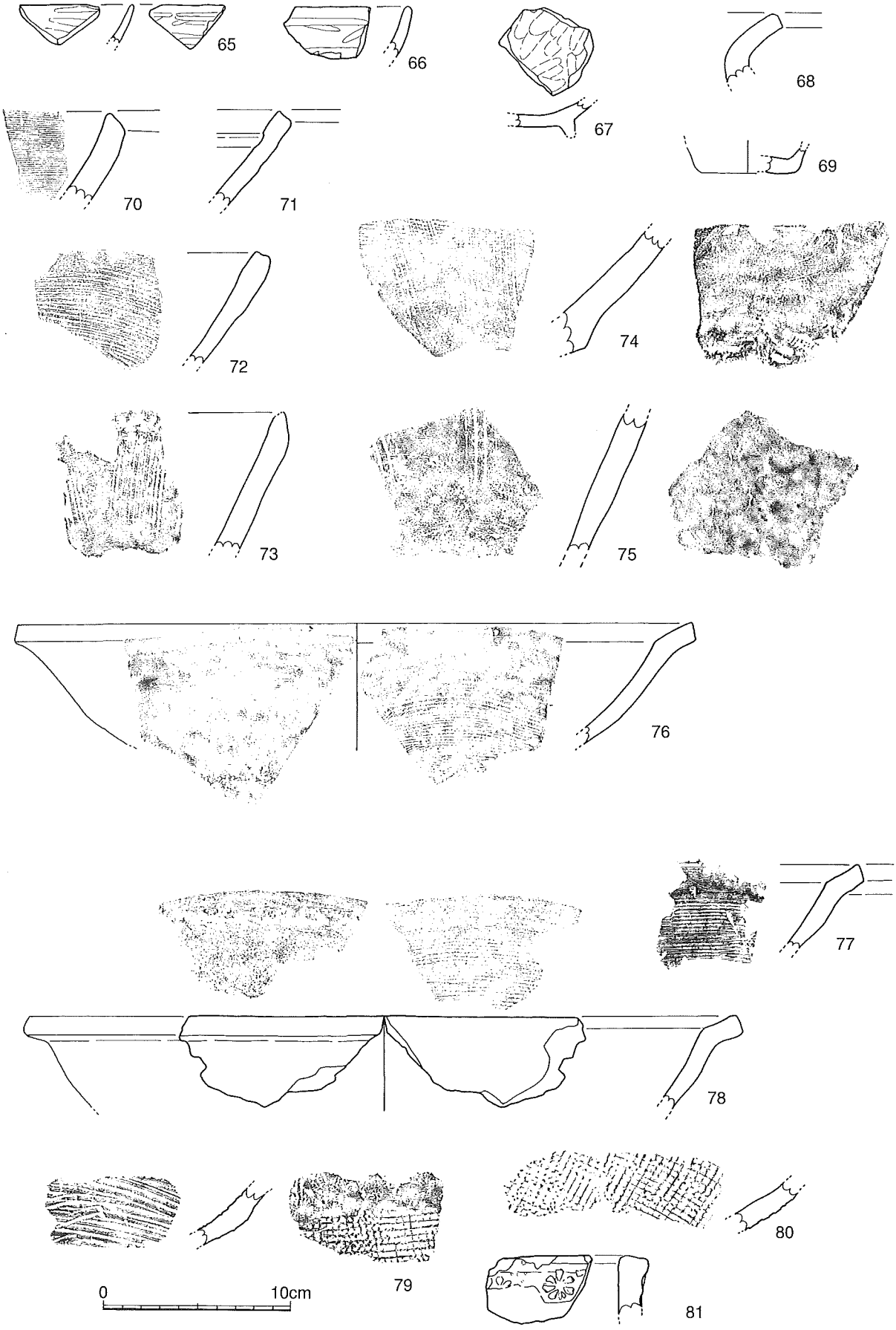
(4) 瓦質土器（第11図）

65～67は瓦器椀である。65・66は口縁部で、65は内外面に、66は外面にヘラミガキの調整痕を残す。胴部は丸く膨らみ直口する形態。67は底部で、内面見込みを中心に太く短いヘラミガキ痕を残す。68は壺口縁部、丸く大きく開く形態。69は瓦質の小型壺底部、底径は4.8cm。

70は鉢口縁部で、やや内向し端部が鋭角におさめられているもの。内面は横方向の粗いハケ目、外面はナデ仕上げが見られる。71は口唇がコの字型に仕上げられた鉢口縁部、内外面ともに丁寧なナデ



第11図　出土土器②［須恵器］（1／3）



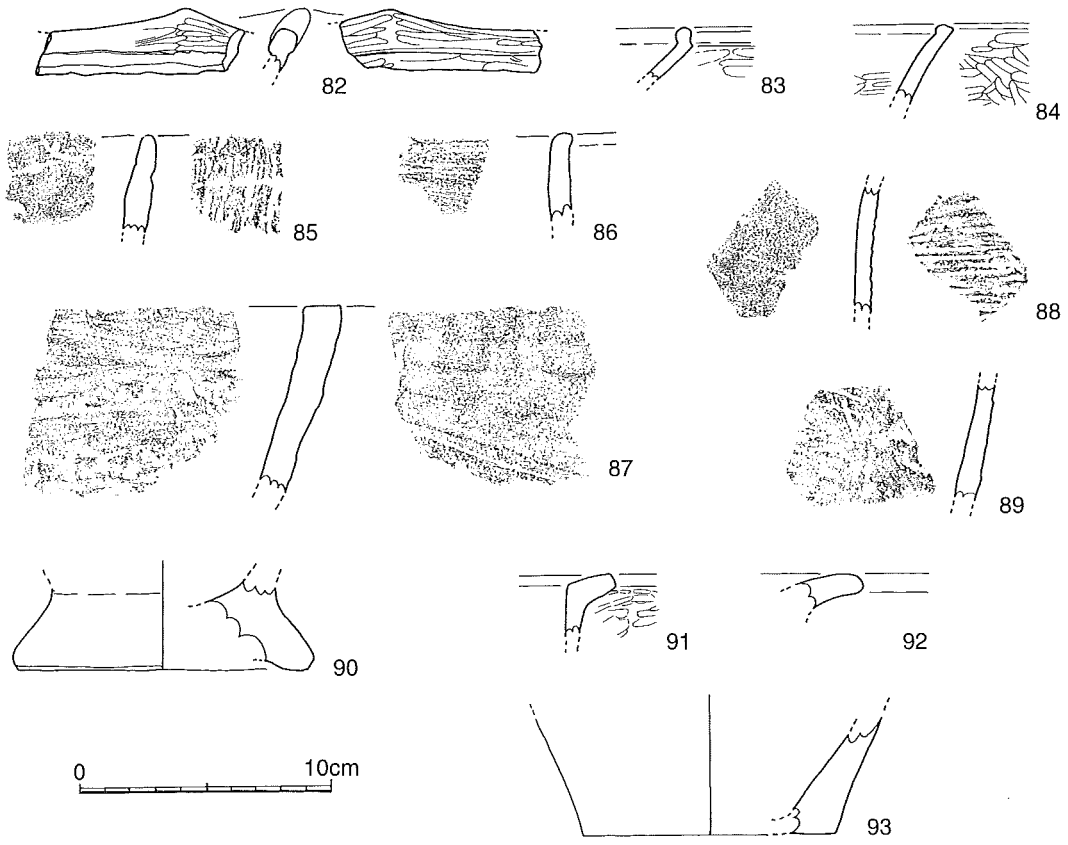
第12図　出土土器③［瓦質土器など］（1/3）

調整が施され、内面には１条の凹線が見られる。72は胴部より口縁端部の器壁が厚く、口唇に浅い「M」字型を有する形態である。内面はナナメ方向の粗いハケ目がみられる。73は直線的に開口する擂鉢で、端部は鋭角に仕上げられている。11本の擂目が観察される。74は擂鉢胴部で、底部から胴部にかけて浅い屈折部をもつ。外面はナデ調整で、内面はヨコ方向のハケ目調整の後10本の擂目を施す。75も擂鉢胴部、内面に４本の擂目を有し、底部付近は使用による摩滅が見られる。

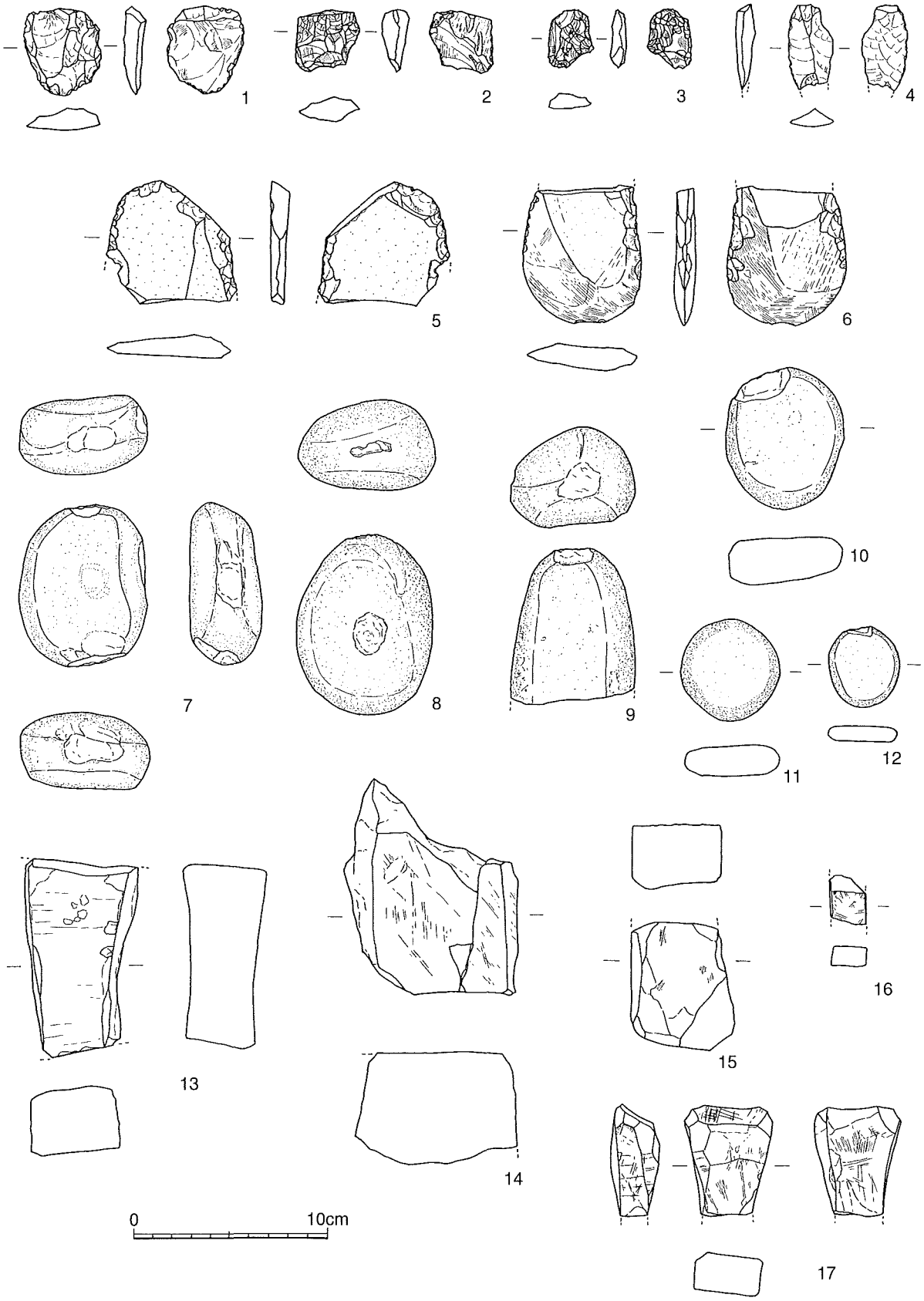
76～80は土鍋である。76は器高が低い形態。胴部は丸く張り出し、胴部から口縁にかけて「く」字形に屈折する。口縁部は短く、端部はコ字形に仕上げられている。内面の口縁下位から底部にかけて粗いハケ目が見られる。口径は約36cmで、高さは約８cmを測る。77・78は口縁部で、口縁が短く若干内弯きみである。78の口径は約37.6cmである。79・80は胴部である。79は内面に粗いハケ目、外面の上位はナデ仕上げと下位は格子叩き目である。80は底部の格子叩き目であろう。土鍋の底の格子叩き目は熱効率をよくする方策として施されたものと考える。81は火鉢口縁部で、口唇に低い突帯上の高まりがあり、その下に花弁状のスタンプの押捺が残る。深鉢Ⅰ類に属する。摩滅が顕著である。

(5) 縄文土器・弥生土器

82～90は縄文時代晩期の土器である。82～84は精製土器である。82は口唇が肥厚する浅鉢の山形口縁部。内外面に丁寧なヘラミガキ痕が残る。83は外反する口縁部の端部に短い立ち上がりがあるもの。84は端部の立ち上がりが退化したものと思われる。いずれもヘラミガキの痕を残す。85は組織痕土器の口縁部、外面に蓆目文が施される。86は条痕文の深鉢土器口縁部。87は内外に条痕をもつ大型深鉢



第13図　出土土器④［縄文土器・弥生土器］（１/３）



第14図　出土石器（1/3）

口縁部か(註3)。88・89は条痕文土器胴部。90は深鉢土器底部、底径は約12cmを推定する。

91～93は弥生土器か。91は口縁が短い逆L字口縁であるが、外面にヘラミガキ痕が観察できる。92は甕口縁部、後期ごろか。93は甕底部、平底で胴部へは急激な立ち上がりである。中期ごろか。

(6) 石　　器（第14図）

1～4は調整痕のある剥片である。1はサヌカイトを素材とし、上面は殴打面を残し、下面端部刃部作り出しを行っている。スクレイパーの未成品か。2は裏面に表皮を残す剥片、両側片に調整痕がみられる。腰岳産黒曜石を素材とする。3は表裏両面に調整痕がある剥片、石鏃未成品か。漆黒色黒曜石を素材とする。4は安山岩の縦長剥片を利用したもので、左側辺に調整痕あり。

5は打製石斧の基部、現存長6.3cm、幅6.8cm、厚さ最大1.0cmを測る。石材は玄武岩。6は局部磨製石斧の刃部、刃先は弧状で丁寧な研磨により仕上げられている。両側辺には粗い調整痕を残している。現存長7.2cm、幅5.1cm、厚さ最大1.1cmを測る。

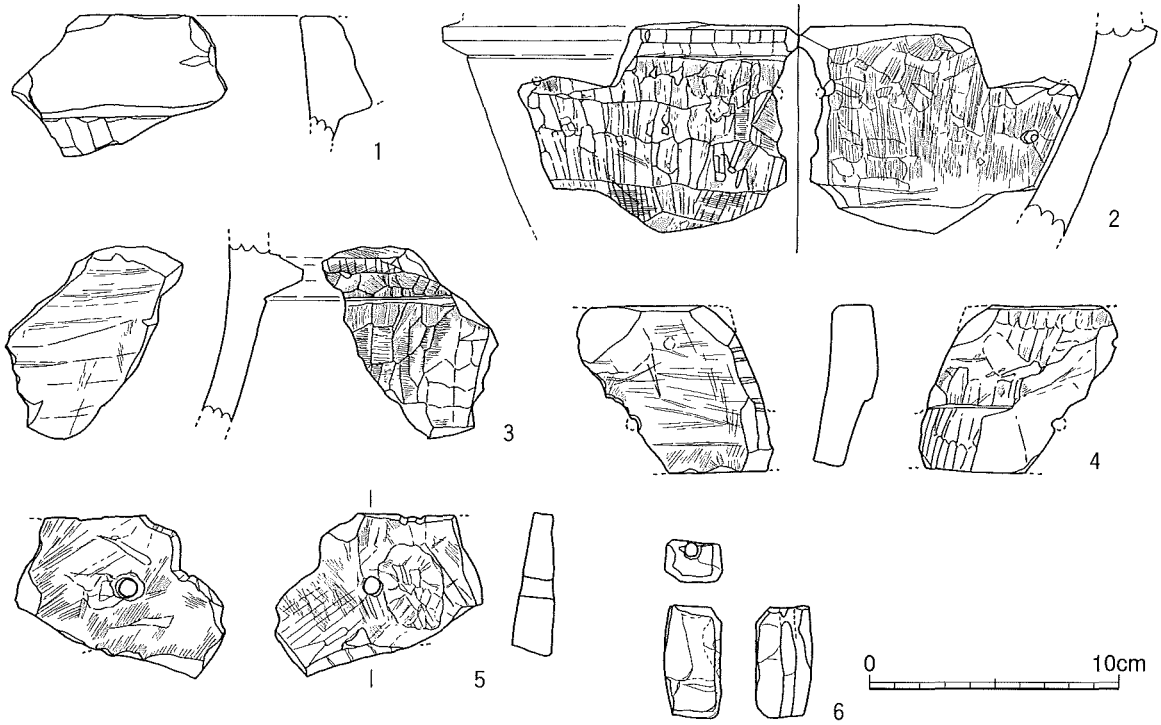
7～9は敲石である。7は両端、右側辺に敲打痕、表面に研磨痕が見られる。長さ8.2cm、幅6.5cm、厚さ3.7cmを測る。石材は玄武岩。8は表全面に研磨痕とほぼ中央部に敲打痕、上端部に敲打痕が残る。石材は玄武岩。長さ9.3cm、幅7.0cm、厚さ4.5cmを測る。9は下半が欠損する縦長の形態、表に研磨痕、上端部に敲打痕。現存長7.6cm、幅6.4cm、厚さ5.0cmを測る。石材は玄武岩。10～12は小型の円盤形石製品。表裏に平坦面をもつが研磨痕は見られない。土器の器面調整に使用されたものか。10は長さ7.2cm、幅6.0cm、厚さ2.4cm。11は長さ5.1cm、幅5.0cm、厚さ1.5cm。12は長さ4.0cm、幅3.5cm、厚さ0.6cmを測る。

13～17は砥石である。13は安山岩製で、表裏と両サイドに研磨面を有す。現存長10.0cm、最大幅5.9cm、最大厚3.1cmを測る。14は据え置き型の大型砥石で、表面のみに研磨痕を残す。被熱の痕跡があり破砕していることから、廃棄されたものか。石材は頁岩と思われる。15は表と両側辺に研磨痕をもち、裏面は剥落あり。石材は玄武岩。現存長6.1cm、最大幅5.1cm、最大厚3.1cmとする。16は両端を欠損する小型砥石で、断面は均整の取れた長方形。石材は乳白色の頁岩。幅は1.6cm、厚さは1.0cm。17は多角形の研ぎ面を有するもので、頁岩を石材とする。断面形は長方形であり、現存長5.2cm、最大幅4.5cm、最大厚2.5cm。携帯用の砥石か。

剥片石器や石斧、敲石については縄文時代の所産であると思われる。ただ、砥石については使い方が多面的で、使用頻度が非常に高いことから、中世の工人たちが利用した工具の可能性が強い。

(7) 滑石製品（第15図）

1～4は滑石製石鍋およびその再加工品である。1は口縁部に幅広の鍔をもつもの。全体的に摩滅を受ける。2は鋭角で断面不等辺台形鍔を有するもので、底部から胴部へはナナメに立ち上がる。内外にノミと研磨の痕跡が明瞭に残る。補修孔が2ヶ所ある。胴径は28.4cmを測る。3は断面正台形鍔を有し、外面にノミの痕跡を明瞭に残している。鍔より下位にススの付着があり、一部に有機物の付着が見られる。4は1と同様口縁部に幅広の鍔を有する形態であるが、その後、周辺部に調整痕があることから再加工の形跡を見ることができる。補修孔が2ヶ所あり、1ヶ所は外面からで貫通していない。5は不定形の石製品で、中央に4㎜ほどの穿孔がある。内外面のノミの痕跡は不明、多くの傷



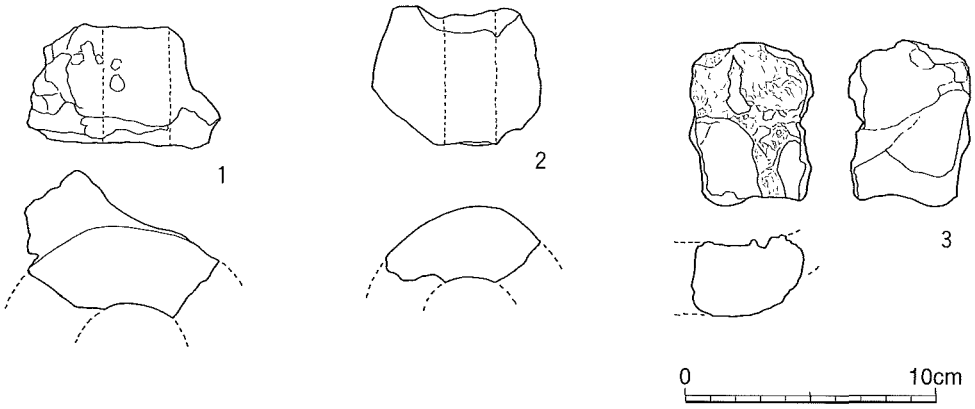
第15図　滑石製品（1/3）

を残す。6は長方形で真ん中に穿孔がある石製品、上からの形状はほぼ正方形を呈す。外面にはススの付着が多い。長さ4.5cm、最大幅2.1cm、厚さ約1.5cmを測る。

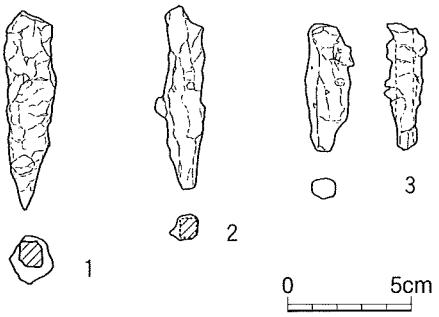
石鍋の形状としては木戸編年Ⅲ類－a～cに比定でき、12世紀後半から14世紀前半ごろまでに編年できる。

(8) **鞴の羽口**（第16図）

1～3は鞴の羽口である。1は径が約10cm、孔径は約5cmが推測される。外面に鉄の付着が見られる。2は径8.5cm、孔径4.0cmが推測される。円筒形の形状で鉄分の付着は見られない。3は形状は不明だが内面に鉄分の付着があり羽口の一部と思われる。



第16図　鞴の羽口（1/3）



第17図　鉄製品（1/3）

(9) 鉄　製　品（第17図）

鞴の羽口や鉄滓など製鉄関係の遺物の出土は多いが、製品はあまり見られない。これらの製品が製鉄関連遺物の産物であるという根拠はないが、建築関係の工材として図化した。

1～3はいずれも釘である。錆化が顕著で外見の形状はほとんど確認できないが、断面についてはある程度判断できる。**1**は断面形がほぼ正方形。長さ約8.0cm、最大幅2.0cm。**2**も1と同様断面が正方形。現存長は約7.1cm、幅1.5cmを測る。**3**は頭部が短いL字形をしている形態で、断面は不明。現存長5cm、最大幅1.6cmを測る。

（註1）遺物の分類・編年については「概説中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編真陽社（2001）を中心として参考にした。以下の土師器・瓦質土器・石鍋の形式分類についても同様である。

（註2）土釜の型式としては、河内・和泉型瓦質焼成土器と京都型瓦質焼成土器に分類されるが、口縁部が直上する形態から京都型と思われる。分類については註1の文献を参考にした。

（註3）87の土器については条痕文の粗製土器と位置づけたが、その後の資料調査で移動式かまどの裾部の可能性もある。形状が不明なため明確ではないが、今後の参考にしたい。

【参考文献】

鈴木康之「第Ⅲ章　遺物1　土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編　1996

美濃口雅朗「樺番城窯跡の中世須恵器(1)」『肥後考古』第10号　肥後考古学会　1997

稗田原遺跡出土遺物観察表［陶磁器・土器など］

番号	調査区	層位	器種	部位	色調		胎土	備考
					内	外		
1	2	2・3	青磁椀	口縁部	灰オリーブ(5Y5/3)	灰オリーブ(5Y5/3)	緻密	
2	2	5	青磁椀	口縁部	灰オリーブ(7.5Y4/2)	灰オリーブ(7.5Y4/2)	緻密	
3	1	4	白磁椀	口縁部	明オリーブ灰(7.5GY6/1)	明オリーブ灰(7.5GY6/1)	緻密	口禿
4	1	2・3	青磁椀	口縁部	黄褐(2.5Y5/3)	黄褐(2.5Y5/3)	やや気孔あり	
5	2	SR4	青磁椀	口縁部	緑灰(7.5GY6/1)	緑灰(7.5GY6/1)	緻密	鎬連弁
6	2	SR4	青磁椀	口縁部	緑灰(7.5GY6/1)	緑灰(7.5GY6/1)	やや気孔あり	鎬連弁
7	1	2・3	青磁椀	口縁部	緑灰(10GY6/1)	緑灰(10GY6/1)	緻密	鎬連弁
8	1	SRレキ4	青磁椀	口縁部	緑灰(7.5GY6/1)	緑灰(7.5GY6/1)	緻密	鎬連弁
9	2	Sトレ4	青磁椀	口縁部	緑灰(7.5GY6/1)	緑灰(7.5GY6/1)	カクセン石多	鎬連弁
10	1	2	青磁椀	口縁部	緑灰(7.5GY6/1)	緑灰(7.5GY6/1)	緻密	鎬連弁
11	2	4	青磁椀	口縁部	灰オリーブ(7.5Y5/3)	灰オリーブ(7.5Y5/3)	緻密	鎬連弁
12	2	SR4	青磁椀	口縁部	緑灰(7.5GY6/1)	緑灰(7.5GY6/1)	緻密	鎬連弁
13	2	Sトレ4	青磁椀	口縁部	灰オリーブ(5Y5/3)	灰オリーブ(5Y5/3)	緻密	鎬連弁
14	1	4	青磁椀	胴部	灰オリーブ(5Y5/3)	灰オリーブ(5Y5/3)	緻密	鎬連弁
15	2	5	青磁椀	胴部	灰オリーブ(7.5Y4/2)	灰オリーブ(7.5Y4/2)	緻密	鎬連弁
16	2	3	青磁椀	口縁部	灰オリーブ(5Y5/2)	灰オリーブ(5Y5/2)	緻密	
17	2	Wトレ4	青磁椀	口縁部	オリーブ黄(5Y6/3)	オリーブ黄(5Y6/3)	緻密	
18	1	SRレキ4	青磁椀	胴部	灰オリーブ(10Y5/2)	灰オリーブ(10Y5/2)	緻密	
19	2	Sトレ4	青磁椀	底部	灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	緻密	胎土目
20	1	SRレキ4	青磁椀	底部	灰オリーブ(7.5Y4/2)	灰オリーブ(7.5Y4/2)	気孔多し	「福」の刻印
21	1	4	青磁椀	底部	緑灰(7.5GY6/1)	緑灰(7.5GY6/1)	緻密	
22	2	SR5	青磁椀	底部	暗オリーブ(5Y4/3)	暗オリーブ(5Y4/3)	緻密	
23	2	5	青磁椀	底部	オリーブ黄(5Y6/4)	オリーブ黄(5Y6/4)	細粒しまりなし	
24	1	SRレキ4	青磁椀	底部	灰オリーブ(10Y5/2)	灰オリーブ(10Y5/2)	緻密	
25	2	5	青磁椀	底部	灰オリーブ(7.5Y5/2)	灰オリーブ(7.5Y5/2)	細粒しまりなし	
26	2	4	青磁椀	底部	灰オリーブ(7.5Y5/2)	灰オリーブ(7.5Y5/2)	緻密	

番号	調査区	層位	器種	部位	色調		胎土	備考
					内	外		
27	1	2	青磁皿	底部	灰オリーブ(7.5Y6/2)	灰オリーブ(7.5Y6/2)	気孔多し	同安窯系
28	2	5	青磁香炉	胴部	明緑灰(10GY8/1)	明緑灰(10GY8/1)		
29	1	4	土師器皿		橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・赤色土粒	へら切り
30	2	4	土師器皿		にぶい黄橙(10YR6/3)	橙(5YR6/6)	石英・赤色土粒	へら切り
31	1	Nトレ4	土師器皿		橙(2.5YR6/8)	橙(2.5YR6/8)	石英・赤色土粒	へら切り
32	2	2・3	土師器皿		にぶい橙(5YR6/3)	にぶい橙(5YR6/3)	石英・長石・金雲母	へら切り
33	1	4	土師器皿		橙(2.5YR6/8)	橙(2.5YR6/8)	石英	回転糸きり
34	1	2	土師器皿		橙(2.5YR6/8)	橙(2.5YR6/8)	石英・赤色土粒	回転糸きり
35	2	5	土師器皿		にぶい橙(5YR6/3)	にぶい橙(5YR6/3)	石英・赤色土粒	回転糸きり
36	1	4	土師器皿		橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	石英・赤色土粒・カクセン石	回転糸きり
37	2	5	土師器皿		にぶい橙(5YR6/4)	灰褐(7.5YR5/2)	石英・金雲母・カクセン石	
38	2	Sトレ4	土師器坏	口縁部	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	石英・金雲母	
39	1	2・3	土師器坏	口縁部	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	石英・赤色土粒・カクセン石	
40	2	2・3	黒色土器椀	底部	暗青灰(5B4/1)	暗青灰(5B4/2)	石英	
41	2	4	火鉢	胴部	灰黄(2.5Y7/2)	灰黄(2.5Y7/2)	雲母	花文スタンプ、瓦器か
42	1	2	土釜	口縁部	灰黄(2.5Y6/2)	にぶい黄橙(10YR7/2)	石英・赤色土粒・カクセン石	
43	1	2・3	甕	胴部	橙(2.5YR6/8)	にぶい黄橙(10YR7/4)	石英	外面格子叩き
44	2	5	把手		にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR6/4)	石英・金雲母・カクセン石	
45	2	Sトレ3	把手		にぶい橙(7.5YR6/3)	にぶい橙(7.5YR6/3)	石英・金雲母・カクセン石	
46	2	4	土錘		赤(10YR5/6)	赤(10YR5/6)	細粒	
47	2	5	甕	口縁部	灰(N5/)	灰(N5/)	石英・カクセン石	
48	1	Nトレ4	甕	胴部	灰(N4/)	灰(N4/)	石英・細粒	
49	2	Wトレ4	甕	胴部	灰(N5/)	灰(N5/)	石英・細粒	
50	2	5	甕	胴部	灰(N5/)	灰(N6/)	石英・金雲母	
51	2	5	甕	胴部	灰(N6/)	灰白(N7/)	石英・細粒	
52	1	ベルト4	甕	胴部	灰(N4/)	灰(N4/)	石英・カクセン石	
53	1	2・3	甕	胴部	灰(N5/)	灰(N5/)	石英・金雲母・カクセン石	
54	2	5	甕	胴部	灰(N5/)	灰(N5/)	石英・細粒	
55	2	アゼ5	甕	胴部	灰(5Y5/1)	褐灰(5YR5/1)	長石・細粒	
56	1	ベルト4	甕	胴部	灰赤(2.5YR4/2)	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	石英・細粒	
57	2	5	甕	胴部	灰白(N7/)	灰白(N7/)	石英・カクセン石	
58	2	SR5	甕	胴部	灰(N6/)	灰(N6/)	細粒	
59	2	5	鉢	口縁部	灰(N4/)	灰(N4/)	石英・細粒	
60	2	Wトレ4	鉢(擂鉢)	口縁部	灰(N5/)	灰(N5/)	石英・白色土粒	
61	2	Wトレ3	鉢(擂鉢)	口縁部	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	石英・カクセン石	片口
62	2	Sトレ4	鉢	胴部	灰(N6/)	灰(N6/)	長石・カクセン石	
63	2	4	鉢	底部	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	長石・カクセン石	
64	2	Wトレ4	坏蓋		灰(N6/)	灰(N6/)	石英・長石	
65	2	Sトレ4	瓦器椀	口縁部	灰白(5Y8/1)	灰(N6/)	細粒しまりなし	
66	2	Wトレ1・2	瓦器椀	口縁部	灰白(10YR8/1)	黄灰(2.5Y5/1)	細粒しまりなし	
67	2	5	瓦器椀	底部	暗灰(3N/)	暗灰(3N/)	細粒	黒色土器か
68	2	5	甕	口縁部	灰白(2.5Y8/2)	灰白(2.5Y8/2)	石英・カクセン石	
69	2	3	壺	底部	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	石英・カクセン石	
70	2	Sトレ3	鉢	口縁部	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y6/1)	石英・カクセン石	
71	1	ベルト4	鉢	口縁部	灰(N5/)	灰(5Y5/1)	石英・カクセン石	
72	2	Sトレ4	鉢	口縁部	暗灰(3N/)	オリーブ黒(5Y3/1)	石英・カクセン石	
73	2	4	鉢(擂鉢)	口縁部	灰(N5/)	灰(N4/)	石英・カクセン石	
74	2	4	鉢(擂鉢)	胴部	灰白(5Y7/1)	にぶい橙(7.5YR7/3)	石英・金雲母・カクセン石	
75	1	SRレキ4	鉢(擂鉢)	胴部	灰白(2.5Y8/2)	黄灰(2.5Y5/1)	石英	
76	1	SRレキ4	土鍋	口縁部	灰白(2.5Y8/1)	黄灰(2.5Y4/1)	石英	
77	2	Sトレ4	土鍋	口縁部	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(2.5Y7/1)	石英・カクセン石	
78	2	Wトレ4	土鍋	口縁部	灰(5Y6/1)	灰黄褐(10YR6/2)	石英・カクセン石	
79	2	Sトレ4	土鍋	胴部	灰(4N/)・にぶい黄橙(10YR7/2)	褐灰(10YR5/1)	石英・カクセン石	外面格子叩き
80	1	2・3	土鍋	胴部	灰(5Y5/1)	灰白(5Y7/1)	石英・金雲母・カクセン石	外面格子叩き
81	21	2・3	火鉢	口縁部	灰黄(2.5Y7/2)	灰(4N/)	石英・金雲母・赤色土粒	花文スタンプ
82	1	4	浅鉢	口縁部	黄灰(2.5Y4/1)	黄灰(2.5Y5/1)	石英・カクセン石	精製土器
83	2	5	浅鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR7/2)	灰(5Y5/1)	石英・カクセン石	精製土器
84	2	Wトレ3	浅鉢	口縁部	暗灰(3N/)	褐灰(7.5YR5/1)	石英・カクセン石	精製土器
85	2	2・3	組織文土器	口縁部	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	石英・カクセン石	
86	1	4	深鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	石英・カクセン石	粗製土器
87	1	4	深鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい橙(5YR6/4)	石英・カクセン石	粗製土器
88	1	ベルト4	深鉢	口縁部	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	石英・カクセン石・赤色土粒	粗製土器
89	2	4	深鉢	胴部	黒褐(5YR3/1)	にぶい橙(5YR6/3)	石英・カクセン石・赤色土粒	粗製土器
90	2	5	深鉢	底部		にぶい橙(5YR6/4)	石英・長石・カクセン石	粗製土器
91	2	Wトレ4	甕	口縁部	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y4/1)	石英・カクセン石・白色土粒	
92	2	2・3	甕	口縁部	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	石英・カクセン石・金雲母	
93	1	SRレキ4	甕	底部	にぶい橙(7.5YR7/3)	灰黄褐(10YR6/2)	石英・カクセン石	

Ⅳ まとめ

中世前期における稗田原遺跡の位置づけ

稗田原遺跡は縄文時代晩期から中世にかけての複合遺跡である。ただこの広い遺跡の中において時代ごとにその中心域が変化していることは調査を経るにつれて判ってきた。

もともとこの遺跡は標高23m～45mの舌状丘陵上に立地するため、縄文時代晩期の遺物包含層や古墳時代の遺構などは丘陵頂部や先端部に存在する。ただし古代から中世の遺構については比較的平担部（礫石原松尾停車場線と野田島原線の交差点付近）に集中しており、この一帯に集落があったと考えられる。平成17年度から今年度にかけて調査を実施した遺跡北側部分では特に中世前期の遺物が多い。つまり中世の遺構は現在の県道野田島原線の路線沿いに集落があったことが推測される。ここに街道（交通路）があったかどうかは明らかではないが、南北方向へ流れる河川跡や柱穴列があるなど路線沿いに町屋が存在した可能性は強い。稗田原遺跡の北側に位置する下宮遺跡、さらに北側の畑中遺跡などはその沿線の遺跡と言える。ただし、本書の歴史的環境のところで前述した雲仙市瑞穂町杉峰城跡や尻無城跡をはじめ、国見町神代城跡、島原市寺中城跡、島原市森岳城跡など地域の拠点的な城館が随所にみられるが、この稗田原遺跡周辺では城館跡を見るとことはできない。つまり、城下町として形成された町屋というよりも宿場町としての性格が強い。

この稗田原遺跡はこれまで15年にわたる調査が実施されているが、実際は未知の部分が多い遺跡である。このような幅広い時代の包含層を有し、古墳時代前期の住居跡が検出された遺跡として重要視し、開発行為がかかる以前に範囲確認調査を実施し遺物・全貌の解明が望まれる。

稗田原遺跡の中世の出土遺物

稗田原遺跡から今までの調査で出土した中世の遺物としては次のとおりである。

日 常 容 器…土師器皿・青磁椀・白磁皿・青花皿・天目茶椀・火鉢（13世紀前半～16世紀）

調理用容器…捏鉢・東播系擂鉢・備前系擂鉢・土釜・土鍋・滑石製石鍋（12世紀後半～16世紀）

貯 蔵 容 器…常滑系甕・須恵器甕（13世紀中葉）

生 産 用 具…鞴の羽口・鉄滓

日常容器や調理用容器、貯蔵容器などの生活感のある遺物が出土することは集落の痕跡があることを物語っている。また、製鉄関連の遺物の多さは町屋の産業の一部として発達したものかもしれない。時期としては12世紀から16世紀と幅広い時期の遺物が出土することも特徴的である。その中でも、各時期の貿易陶磁器、広域に広がる国産土器・陶磁器などが出土することが疑問に残る。本文中でも触れたが、これらの陶磁器が特殊な地域のみ出土するものなのか、それともすでに日常的に利用されているものか、こうした視点でさらに検証することが大切であろう。今回は十分な検証をする猶予もなく申し訳なく感じるが、さらに広範囲な地域での資料収集が必要であり、十分な資料調査を実施したのちに再度検証したいと考える。

写　真　図　版

稗田原遺跡近景
（手前が野田島原線）

河川跡検出状況①

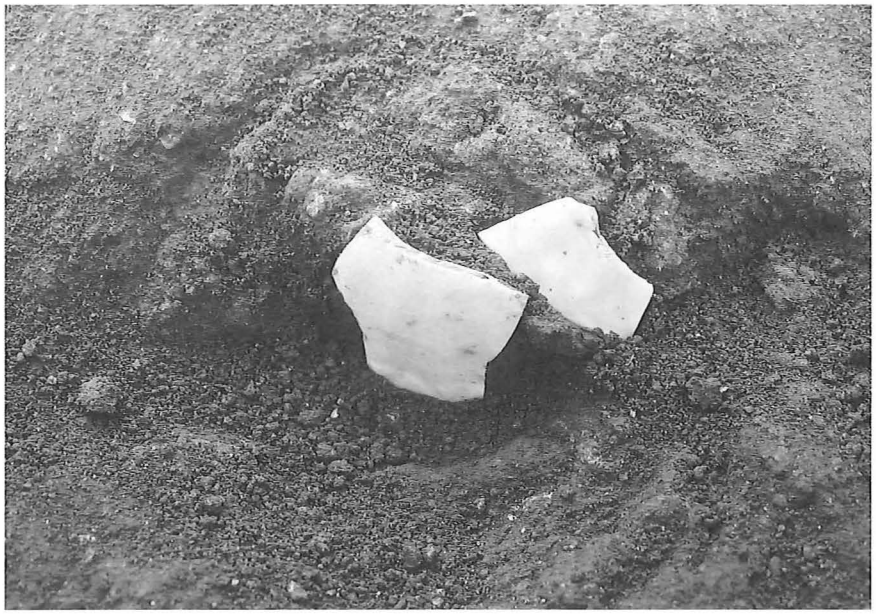
河川跡検出状況②

図版 2

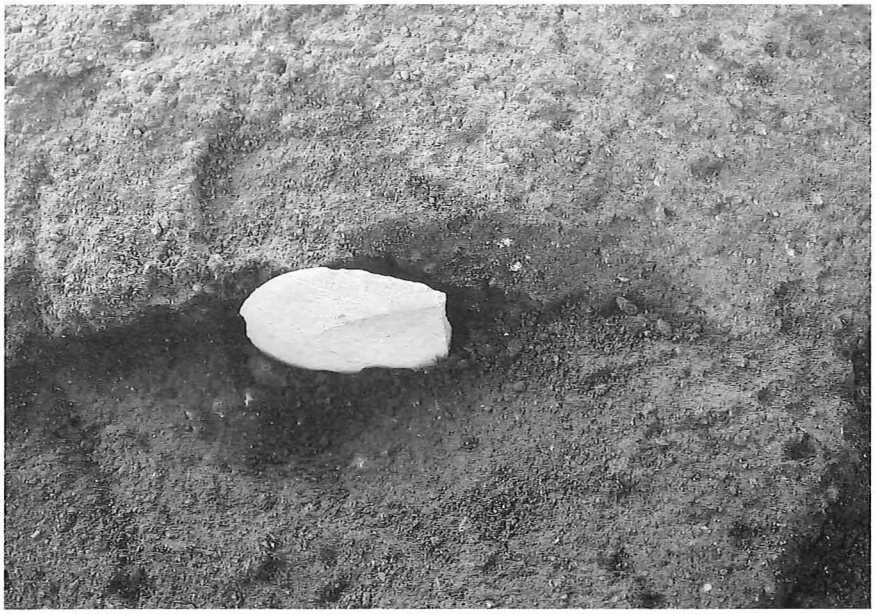
土層堆積状況

河川内礫集中状況

河川内石列検出状況



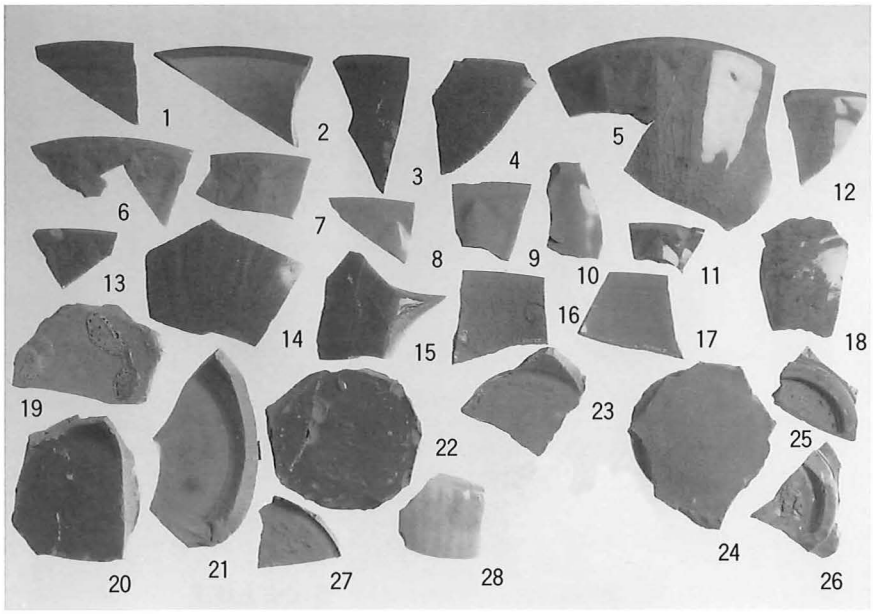
青磁出土状況

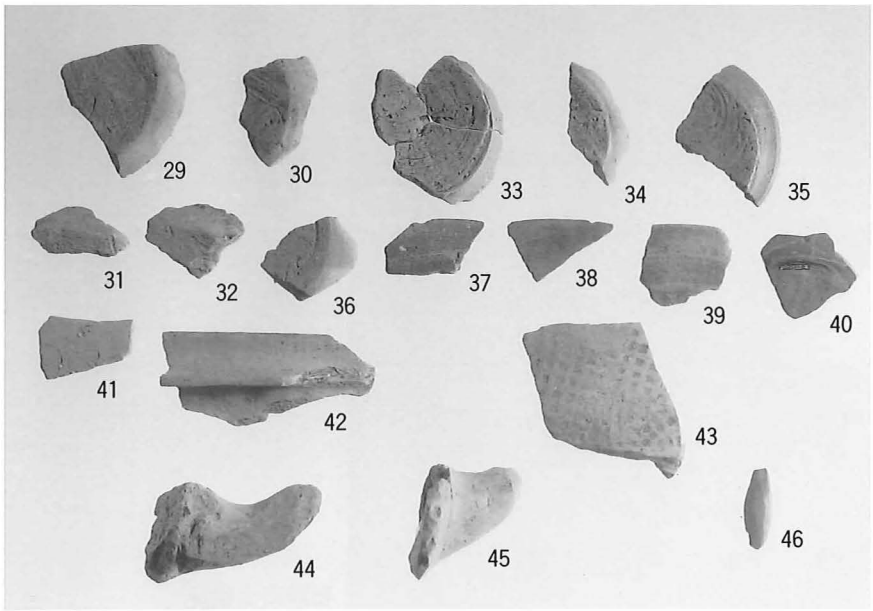


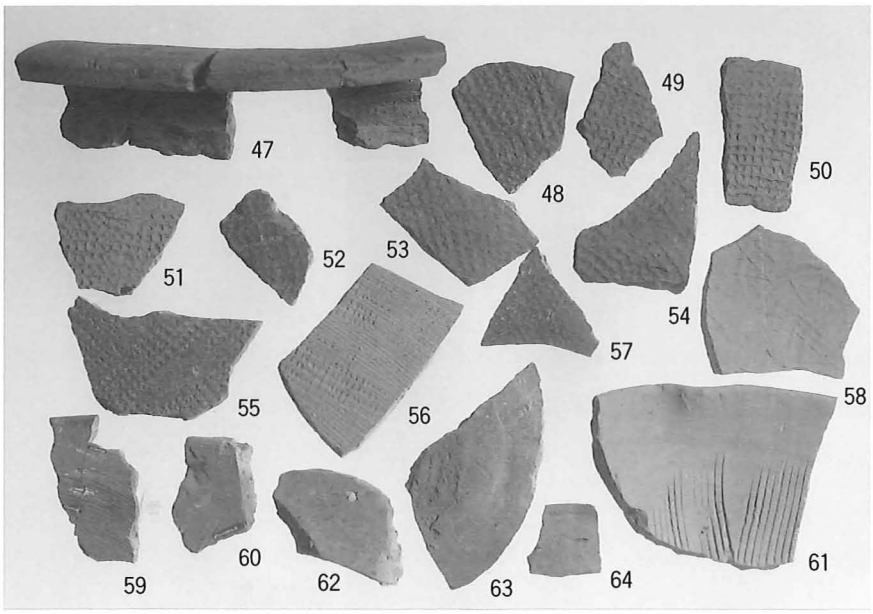
石斧出土状況

調査風景

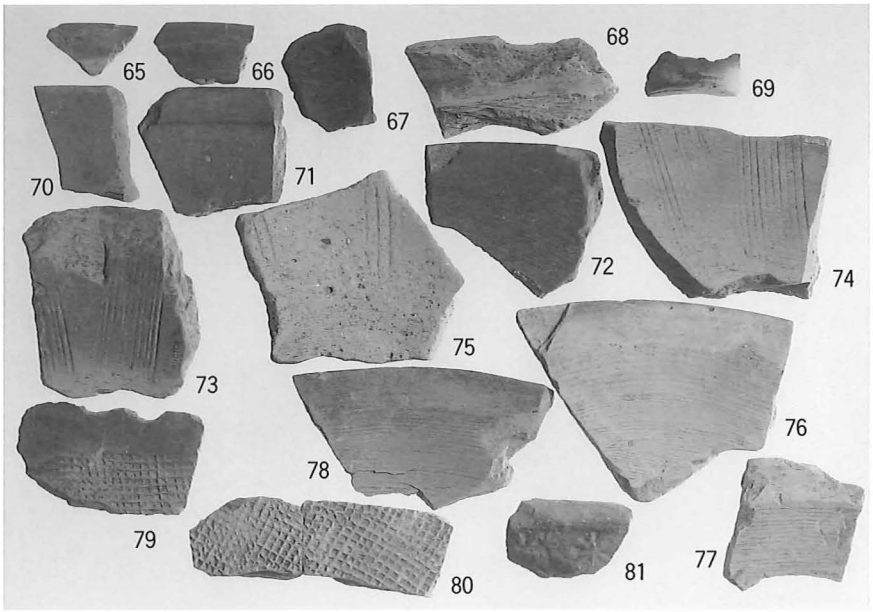
図版 4

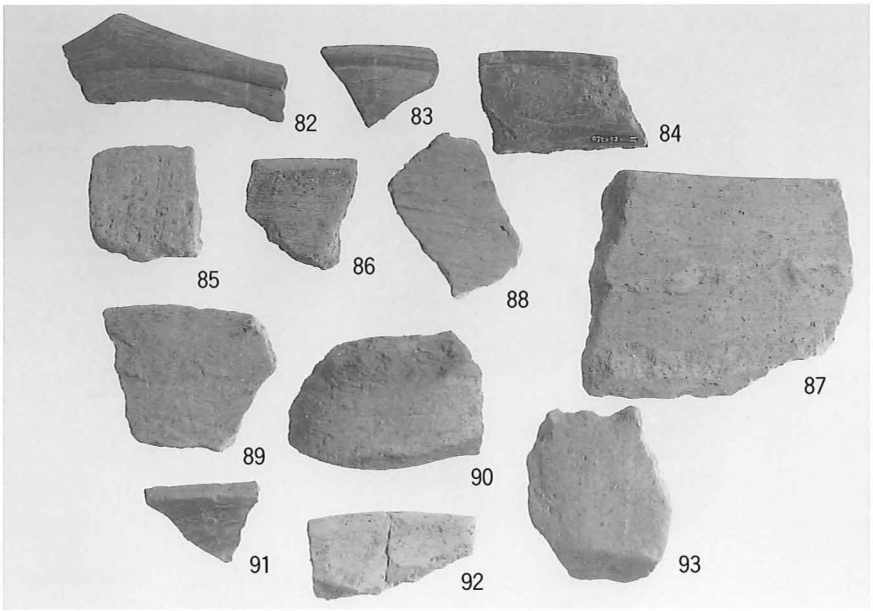

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

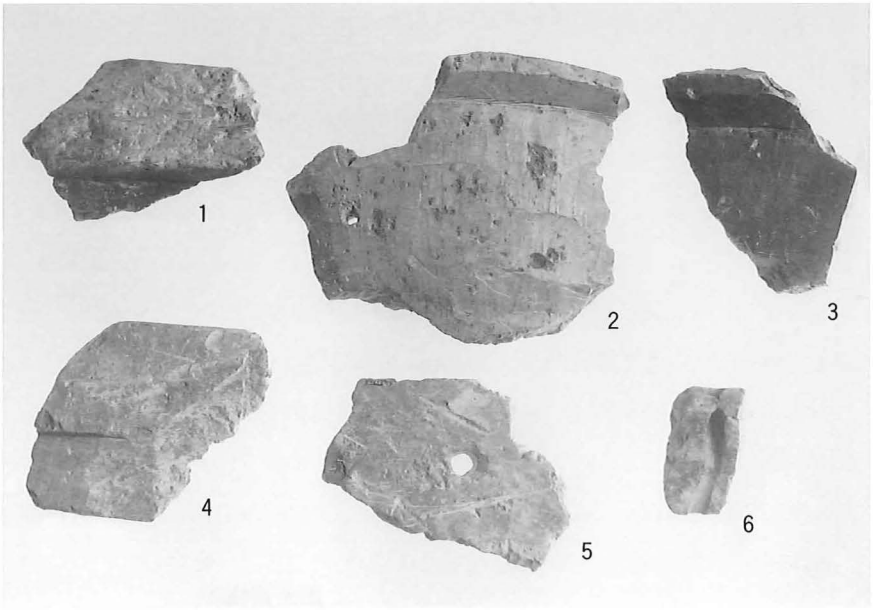

29
30
33
34
35
31
32
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46


47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64

出土遺物①

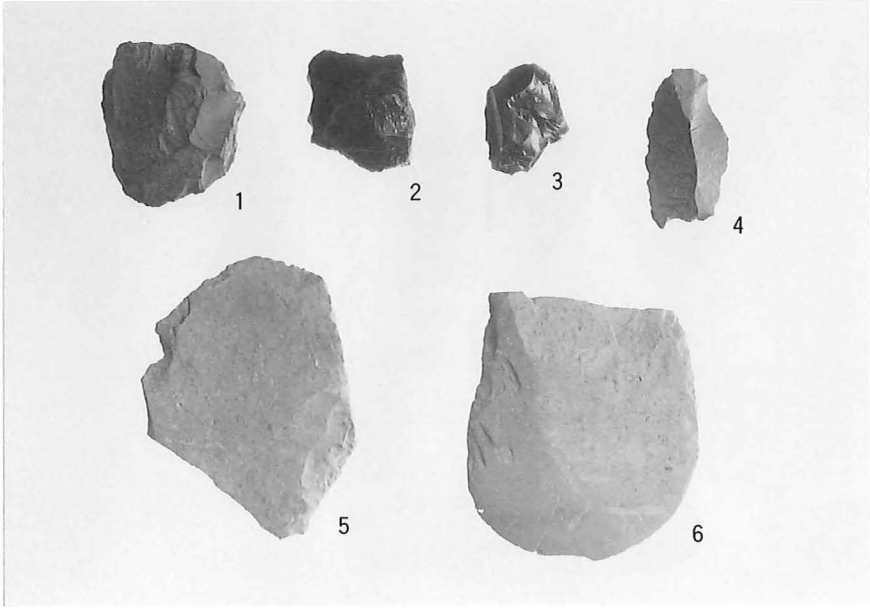

65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81

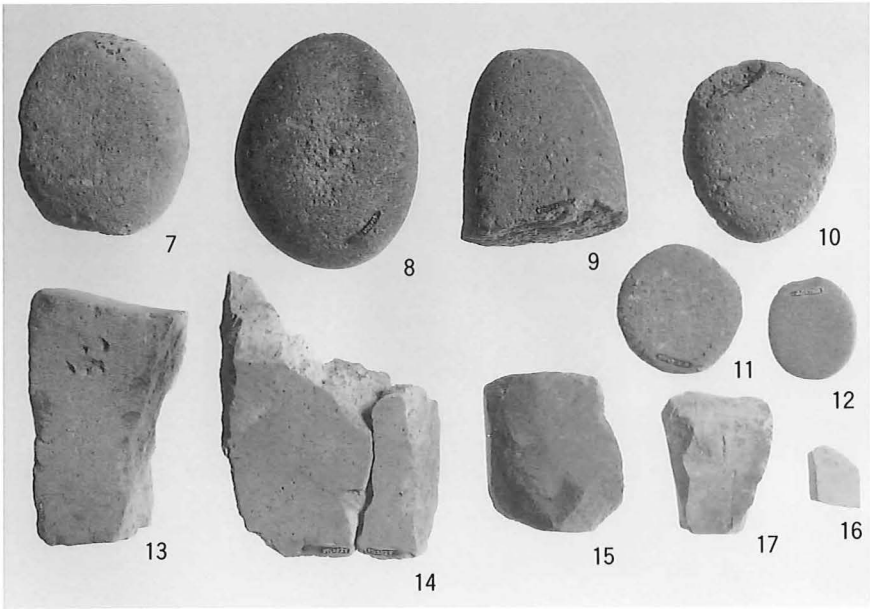

82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93

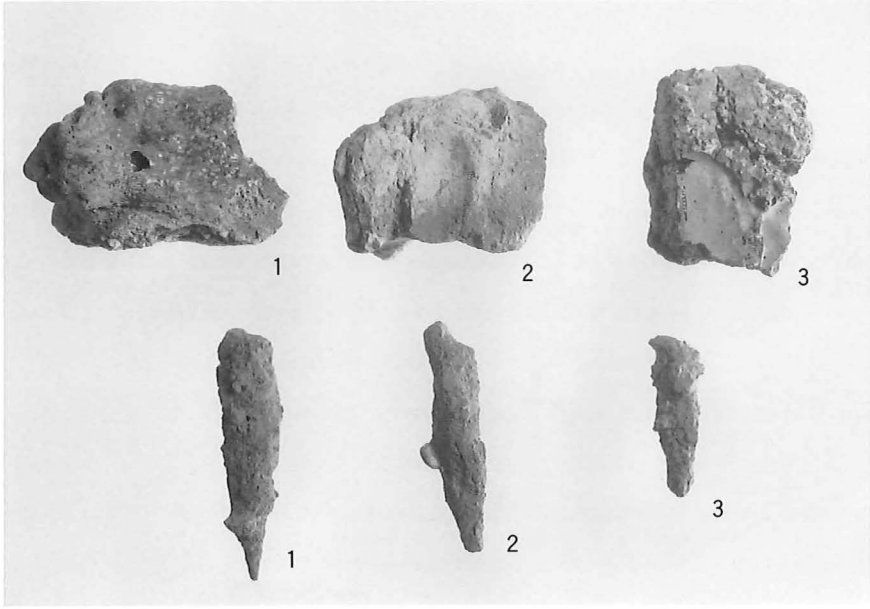

1
2
3
4
5
6

出土遺物②

図版 6







出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	ひえだばるいせき
書名	稗田原遺跡Ⅶ
副書名	一般県道野田島原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅶ
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第198集
編著者名	寺田正剛
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850－8570　長崎県長崎市江戸町２番13号　TEL095－824－1111
発行年月日	西暦2008年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
稗田原遺跡（ひえだばるいせき）	長崎県（ながさきけん） 島原市（しまばらし） 稗田町（ひえだちょう）	3	92-74	32° 48′ 48″	130° 21′ 10″	20071022 ～ 20071102	105m²	道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稗田原遺跡	遺物包蔵地	縄文時代 ～ 中世	河川跡 柱穴 土壙 石列遺構	貿易陶磁器 土師器 須恵器 瓦質土器 縄文土器 滑石製品 打製石斧 敲石・砥石 鞴の羽口 金属製品	中世前期の河川跡 製鉄関係の遺物 土鍋・土釜などの出土

長崎県文化財調査報告書　第198集

一般県道野田島原線道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

稗田原遺跡Ⅶ

平成20年３月31日

発行者　長崎県教育委員会
〒850-8570　長崎市江戸町２番13号
☎095－824－1111

印刷所　株式会社　昭　和　堂
長崎県諫早市長野町1007-２
☎0957－22－6000